特116
135

特116
135

遍ねく讀者に告ぐ

本篇は、敵を救への實行を世界萬衆に示すを其本旨とするものなれば、こは人種の如何、邦國の何れたると將た一個人たり、一家庭、一團體たるを問はず、更に又男女老幼職業の如何を論ずるなく、總ての人類に於て悉く自己と分離するものにあらずして密着の交渉を有す。されば我國人にして本篇を理解すれば日本國を救へ、自己の家庭を救へ、自己を救へとなるに同じく、之を支那人に讀ましむれば中華民國を救へとなり、米國人に讀ましむれば米國を救へとなり、獨逸人に讀ましむれば獨逸國を救へとなるが如く、冓他あらゆる邦國に於ても亦英國人には英國を救へとなり、佛國人には佛國、露國人には露國を救へとなると同時に、且つ一家庭と自己を救へともなること勿論なり。而かも此の如き世を救ひ、國家を救ひ、家庭を救ひ、一個人を救ふの實現は、單に敵を救ふの一實行が其根基となりて胚胎し、以て無限に繁殖するものなることを了知して本篇を熟讀玩味せられんことを切望す。蓋し此の如きは古聖英靈の活躍を意味し、天國樂國の開拓に進捗するの最大捷徑に外ならざればなり。

著者敬白

同會 寄贈本

大正
7 3 5
寄贈

鴉鼠悟覺之略解

私が茲に阿蘇の五岳を寫したる所以、鴉鼠之悟覺は則ち阿蘇の五岳と同一意義を有するが故にして、本篇論述の趣旨が、世に陰れたるものを顯彰するの一點にあるを以て、世界第一と稱せらるゝ噴火山の特に陰れたる眞髓を世に曉らしむるといふ事は則ち鴉鼠の陰れたる有益の裏面を世に示すといふに少しの異なりもない、由來阿蘇山は其舊噴火口が四里に六里の廣袤を有し其噴火口内に人口五千の郡民を衣食せしむるといふことが、世界第一の主要點なるかの如く世に信ぜらるゝも、私の所思は之に異なり、五岳が並立して其狀恰も人間の隻手に於ける五指に同じく、此阿蘇山の悟覺によりて世界の平和を繕き得るといふの一點にあることを信じて疑はない。假令舊噴火口が如何に廣大なりとも、山容如何に美なりとも、噴火の活動如何に猛烈なりとも、何んで之を世界第一なりと稱揚するの理があらう。阿蘇山古來より壽安鎭國山と唱えられ、其實、女性的の溫和なる靈山なればこそ、他面に於て男性的獅子吼的の噴火をもなすなれ、換言すれば文あればこそ武も亦發揮すべく、而かも數千年來、絶えず人間に對して平和の根本義を暗示したりと雖も、人にして耳を開き之を聽くことを知らざれば、聽かざる曉らざるの罪にして靈山には咎なきなり。然れども時は來れり。今此時に於て鴉と鼠の正解と併せて、阿蘇靈山の眞髓を示して社會平和の曉明を告ぐるの一大鴉鳴たらしめんが爲めに、鴉鼠山

麓、願成就峠の邊、倒之足の里に生れたる著者が、茲に靈山を意寫して其前途有望を祝福せんの微意に外ならないのである。因に曰ふ、日露戰役後バーヤン(媒安)が阿蘇と改名し、國幣中社なりし阿蘇神社が官幣大社に昇格したること亦果して何等の暗示なるかを思ふの要が存して居ると思ふ。

△新約全書ヨハネ默示錄

四羽(ヨハト)とは飛鳥の山の黑白川

神に數鹿流(スガル)の音とこそきけ

(著者 鷲)

△裏耶蘇敎を祝福して

十の字を半ばキリスト手を栞り

聽くの巖に光る浦安

(友人 鷹)

(一)根子嶽　(二)高嶽　(三)中嶽
(四)杵島嶽　(五)烏帽子嶽

はしがき

本篇は不肖なる私が、現代唯一の宗教的觀念の立場によつて、浦安教卽ち裏面的耶蘇教なるものを樹立するの宣言のやうではあるが、由來人造的宗教なるものが世に存立する筈はないので、宗教なるものは人間が之を樹立せしむる以前に於て自然に樹立して居る筈、されば茲に述ぶる所は凡そ人間の欲する所、將た人間に必需なる所のものは旣に業に人間には不知不識の間に嚴然として宇宙間に確立して居るといふ事實其儘と、併せて其證左を擧示するに過ぎないので、其實を言へば樹立といふことは私の嘘言なのである。是故に若しも本編を讀む人にして、私が一の宗教を樹立せんかの野心にてもあるやうに感ぜらるゝならば、夫れは大なる間違であり且つ世を誤るの基であることを豫め茲に警告して置きたいのである。是を以て本篇を讀まれたる人にして、其意味を會得開悟せられたる上は、本篇の全部又は其一部を新聞雜誌に轉載せらるゝか、又は本篇を複製飜刻せらるゝとも、そは私に於て毫も厭ふ所なく、寧ろ却て私の所謂宗教觀念が假令一部にても、世に理解せられ流布擴延せんことは、私の唯一の希望であり喜悅であるので、此の如き場合假令私に對して無斷に、更に如何樣の踐附けになし給ふとも、之れ亦私の毫末も厭ふところで無いことを茲に誓つて置きたいと思ふ。——終りに私が常に座右銘として居る、彼の大英國スタンレー氏の一語を藉りて自序に更へ、讀者も亦之に由り其眞

意のあるところを曉り給えかしと爾云

業を營む心は則ち是れ喜の宿る所。
進んで止まざるは名譽の集る所以なり。
又
義務の道は則ち是れ光榮の道なり。

事大なれば喜も亦多し。大丈夫須らく危險を犯すの精神なかるべからず、殆んど人力を以て勝ち難きの惡魔を征伐し、愈よ益々其鋭を磨くに非れば、以て天國に好個の地位を占め得べきにあらず。徒に前途の困難を豫想して以て手を下さゞるは是れ痴漢の所爲のみ。其日は其日の事を爲せ安眠は汝の心を幸快ならしむるに足るなり。

大正七年一月

著者しるす

敵を救へ

(裏耶蘇教樹立宣言)

目次

大正七年一月一日曉明一聲

(一) 日本人は鴉烏と雀と鼠とを眞に理解せねばならぬ……一
(二) 苦言は愛の實現である……二
(三) 世界の平和を企圖するといふことも亦一小些事に過ぎない……四
(四) 六數の解釋は人間界に於ける唯一の必要條件である……六
(五) 人間の所謂善惡は相對の語である……八
(六) 人間の眼と耳とは一面的と表裏二面的との違ひがある……九
(七) 人間は神の御手に縋がらねば墜落の深淵に沈んで了ふ……一〇

目次

(八) 人身體中に於て常に犧牲の本能を發揮して居るものは人の手である……一一
(九) 神は無限の慈愛である……一二
(十) 第十九世紀は知識の開花時代であつた、二十世紀は落花して未熟の結果を始じめ、二十一、二十二世紀に成熟して二十三世紀は收獲時代である……一三
(十一) 世の中に三數を以て立ち得るものは一事物も存在しない……一五
(十二) 數とは確固不動なる事物は世に絶無なりとの神の默示に外ならぬ……一六
(十三) 靈長とは耳の動物といふ意味である……一七
(十四) 人間の隻手には五本の指はないのである……一七
(十五) 日本は隻手の國であるから、手を理解せねば其

眞價は認められぬ……一九
(十六) 宗教とは眼以て見るが如き微小なる實體ではない……二二
(十七) 足のうらを手に理解することは、人間萬全の基となる……二四
(十八) 人生の理解は今日の場合は、鴉の理解より進まねばならぬ……二六
(十九) 廿三數は一大變轉機を示すの數である……二九
(二十) 私は變人ではないのである……三三
(二十一) 人間が病氣の場合に醫者を賴らば、世界全體の病氣は神に賴るが當然である……三四
(二十二) 人間には男女兩性を正解することが、隨一の要義にして之れ則ち正反對を受容するの階梯となる……三五
(二十三) 現時の大戰亂は男性と女性との鬪爭に外ならぬ……三六

目次

目次

（二十四）中は則ち生命にして人間は勿論、あらゆる事物中に中なきものは天地間に一つもない……三八
（二十五）現今世界全體を支配する人類思想は悉く獨逸思想である……四二
（二十六）今日以後に於ては愛の實行卽ち犧牲的無形無象の宗教が望ましいのである……四三

目次了

敵を救へ

（裏耶蘇教樹立宣言）

帝國數理學會主幹　醫師　市原鷲頭述

大正七年戊午一月一日曉明一聲

大正七年一月一日に於ける、私の曉明一聲は「敵を救へ」の叫びの外にはない。本年の私の一事業否な自分の生命と信じて、働く所の全部は、此「敵を救へ」の絶叫と實行との一貫である。されば此一聲は、私の生命にして、私が此世に生存する限りは、私の一身は此一聲と相終始して決して離れない積である。而して私の信ずる所によれば、元來生命といふものは、無限卽ち滅盡することなきが故に生命であつて、有限の生命などゝいふものは、宇宙間に絶無なるものと斷定して憚らないものと思ふ。之れは私一個の專斷でなくて、古昔の聖賢達は皆さう訓えられ

(1)

日本人は鴉鳥と雀と鼠とを眞に理解せねばならぬ

大正七年戊午一月一日曉明一聲

日本人は鴉鳥と雀と鼠とを眞に理解せねばならぬ、私の曉明一聲は「敵を救へ」の叫びの外にはない。本年の私の一事業否な自分の生命と信じて、働く所の全部は、此「敵を救へ」の絶叫と實行との一貫である。されば此一聲は、私の生命にして、私が此世に生存する限りは、私の一身は此一聲と相終始して決して離れない積である。而して私の信ずる所によれば、元來生命といふものは、無限卽ち滅盡することなきが故に生命であつて、有限の生命などゝいふものは、宇宙間に絶無なるものと斷定して憚らないものと思ふ。之れは私一個の專斷でなくて、古昔の聖賢達は皆さう訓えられて居るから、之れは間違ひのない斷案として宜からうと信じて居る。此斷案に仍れば、私の生命卽ち本年劈頭に於ける曉明の第一聲たる「敵を救へ」の一語は、未來永劫盡くることなき一語であると信じて疑はない。——東天に曉を告ぐるものは、鴉鳴であつて、之れは所謂暗夜の鴉といふ俚諺の夫れの如く、暗中に於ける眞黑なる無聲の禽類のそれが、混沌たる其本然を脫して、東天の曙光を告ぐる所、卽ち宇宙に於ける明暗兩境の一轉機を指示する孝行（かう〳〵）の絶叫は恰も、人間に於ける眞と僞との辯別を人間に訓示する自然の默契とすることが出來やうと思ふ。今之を宗教的の言葉を以てすれば、彼のヨハネのいふが如く、「光りは暗きに照り暗

きは之を曉らざりき」この暗を照輝するの光りを告ぐるものとは、鴉鳴であるといふことは目前の事實である。宜なり、鴉は古來より百哺の孝を實踐して、人間に道德の根元を默示する處よりするも、萬物の靈長なりと自誇自稱する人類をして、却て心中赧然たる念に堪えざらしむること亦事實である。曉明の第二聲は孝に次で忠々（ちゆう〳〵）を絶叫するの雀にぞある。

キリスト宣はく、二羽の雀は一錢にて售るにあらずやと。然らば一羽の雀は五りん」にて售るではないか。五りんは半、卽ち五倫にして、孝に胚胎して忠に達するものといふに妨げはあるまい。然れども思へ、現今に於て世は鴉雀等を以て、之を有益視するよりは、寧ろ有害視することが現代の一般思潮なることを。されど之を眞に理解するといふことは、現代特にも日本國民に於て今日其必要に迫つて居ることを絶叫したい。それは私の我國同胞に對する警告の豫備となるからである。」

(2) 苦言は愛の實現である

私が現代を稱して、眼目的、一面的、極端的なりと批判するのは、最も親愛なる我同胞に對して、誠心誠意を以て警告すべきの必要あるを信ずるが爲めにして、右に述べたる鴉と雀の理解にしても之を正當に理解しやうと思ふならば、卽ち表裏觀、二面觀、兩端觀に依らなければ得られないので、此一理解は事小なるが如きも、聽ては自己一身の理解より家庭の理解に及び、次で日本一ヶ國の理解に達し、續て三千世界を六千世界に化し、宇宙の六合を十二合に轉變し更に二十二合を收得するの前提となるのである由來鴉と雀とは人間に有害視せられ居ることは事實であるが、こは一面觀察に由る誤解に過ぎずして、其裏面には有益なる他面が潛んでゐる、以下其梗概を述ぶる積りであるから姑らく忍んで私の說明を傾讀し給はんことを切望に堪えない次第である」

抑も鴉烏が曉天に孝々を絶叫することは、所謂神の默示と信ずべきは人間當然の義務にして、國俗日を指して金烏と稱し、月の玉兎に對峙せしむるは、烏は太陽なる女性を意味するが爲めである。今鴉烏なるものゝ人間に於ける有益なる一部を示せば、彼れが人間界に於ける凶事を豫告する、無料無價の無線電信を意味する益を有するのみならず、隨所に獸屍魚腸等の不潔物あらんか、野犬さえも之を屑とせざるに拘らず、彼れ克く其臭骸を食して人間に淸潔を喜ばしむる、何んで之れが我々人間に有害無益であらうか。又雀にしても然うであつて、誰が雀に對し特に飼料を給して之を養ふ人があらう。皆均しく我々人間の零れ落ちを拾ふて、却て人間をして天物拋顚の罪科を減少して、間接に人間の幸福を保護するに努め、每朝早く起き出でゝ、忠々を絶叫し以て人間の朝寢を戒しむるもの、何んで之れが害烏であらう。古語に曰く、雀海中に入りて蛤となると、動物學上に於て果して此の如きことあるや否やを知らずと雖も、其意義を察すれば、蛤は飽に對して人の手と足の關係を有し、今蛤を手とすれば飽は其半ばにして包則ち滿足を表するが故に、之を手と足、卽ち半と滿足とに理解することは決して無理ではない。事實果して然りとすれば、又小なる雀にも其他面に於て大なる鷲の意味を有すとなすことも强ち無理ではあるまい。之れ亦蚯蚓一たび機を得れば化して蛟龍となるの類か」

されど私の曉明一聲たる「敵を救へ」の一語、そは古來聖賢に由りて傳えられたる平凡の眞理ではあるが、現今に於て其實行が甚しく乏少となつて居るは爭はれぬ事實である。假令山海の珍味と雖も之を食してこそ美味も感知せらるべく、只之を見たり聽いたりした許りでは何の味も判かるものでない、卽ち其味を知悉するものといふことは出來ない。而して山海の珍味といふものは始めより天然に隨所に布蔓して居るのでなく、いろ〳〵の人工を加へて始めて美味を發揮するものである。之と同樣に此「敵を愛せよ」「敵を救へ」といふ詞も仍り自然其儘であつて之を料理せねば美味を現はすことは出來るものではない。之を庖丁するには是非共人の手に據らねばならぬ、之を庖刀するといふことが本

篇所論の主とする所で、究極すれば庖刀を把持操作する人の手に由つて世の平和を開發するといふに歸着するのである。憶ふに「敵を救へ」の一語は隣人を愛せよ、反對を受けよ、神を信せよ、自然に柔順なれ、又仁とか、愛とか、恕とか報恩とかいふことゝ全然同一にして、今日の現在に就て之を言へば「敵國を愛せよ」「獨逸を救へ」といふことになるのではあるまいか。然り、さうと外思えぬではないか。果して然らば此一語を庖刀して萬民に山海の珍味に比すべき自然の偉愛を賞味せしむることが何んで人間の不自然であらう。ア、敵を愛せよ、獨逸を救へ、之れが何故に今日に於て必要であるかは、神の默示なる人の手に據らなければ茲に一刀兩斷の料理は六かしい、是が則ち自然中の自然である。

(3) 世界の平和を企圖するといふことも亦一小些事に過ぎない

世に陰れて而かも有害無益なる禽類と目せらるゝ鴉と雀、卽ち忠と孝とを世に顯彰することは之を一轉すれば陰なるものを陽化することになり、更に一轉すれば惡を善化することになるが故に、之れ亦一個人の疾病を化して健康となし社會の戰亂を變じて平和となすといふことゝ臺末の違ひはない。されば現時に於ける世界的の大戰亂を鎭定するといふことも、其實は之れと同一律を以て論ずべきで、敢て六かしいことでもあるまい。元來人間が現代の如く總て一面的表面的、極端的思想に瞞着せられ支配せられ、換言すれば思想の奴隷となつて居る時代には、難かしいことは飽まで難かしく思ひ、容易しいことは飽まで容易しく思ふのであるが、其實さう許りでもなく、難事が易事で、易事が却て難事であるといふ他面も確かに存して居るのである。其之を知ることが所謂人間智慮の始めにして、之れでなくては事物の眞相を窺ふことは出來ないのである。然るに現代人の如く自己の生命を求むるに就ても、只徒らに外部に於てのみ之を獵渉せんことに熱中しても、夫れは駄目の

骨頂である。斯く言えば餘りに酷評のやうにも聽えるが、之れも事實ならば致方がないではないか。現に今日の社會は政治家を以て大なるものとし、一家庭の主人を小なるものとするの一面的極端思想が跋扈して居るが爲めに、事實に於て家庭を治むることを知らぬ國家の政治家、國家の經濟家なるものが到る所にウヨ〳〵して居るではないか。更に之を今回の大戰亂に就て見るも、交戰各國が只々極端のみに走つて只管勝利を得んことにのみ熱中して、却て勝利なるものが、身方の中、否な更に自己自心の陰微なる中其ものに潛伏して居ることを曉らぬのは現在の事實ではないか。局外より之を見て批評すれば、世界中の人間が恰も五里霧中に彷徨し、而して光明を認めんことに焦慮するも、其方途に惑ふ爲めに尙益々迷路に深入りするの有樣に類するといふより外はない。偖こそ此迷路を脫せしむる爲めに微光を認めしめんには、鴉雀等の理解を前提として之を示導することも、目下に於ける止を得ざるの一策とすべきではないか。私が鴉及び雀に就て其表裏を說くは、凡そ事物には表裏ある一部の證據を提示するに過きないのであるが。思ふに天地間に於て表裏なきの事物あるの理もなく、又陰陽あらざる現象の存する實もなければ、旣に前に述べたるが如く有害の裏面を探究して有益の實を得ることは、之れ則ち自然の自然たる所以にして、鴉及び雀は無論のこと、世に百害あつて一利なしと目せらるゝ鼠でさえも亦有用の他面があるではないか。現に之を嫌忌する傍らには、反對に之を福神と崇め、大黑天の使者なりと尊ぶ人もあることは實際である。今其理由を攷ふるに、鼠類は克く風火害の襲來を豫知すること乃至は一家の吉凶禍福を豫知するより見るも、こは人間が數十萬金を費して經營する所の氣象臺に比して、敢て優るとも決して劣ることなく、之れ亦確かに無價の氣象臺といはれやうと思ふ。——のみならず鼠族は醫學上の動物試驗に犧牲となつて人類の病理研究に貢獻するの功績や、零碎の不用物を食して自己の身體を造り以て猫の食料に

犧牲となることや、且つは「ペスト」が人類を襲ふや、先づ自ら犧牲となつて人類に病害の襲來を告知する等に考え到れば、之れ亦百害あつて一利なきものといふことは出來ぬ。總て此の如く萬殊の事物に就て其彼此を考察すれば何物にも悉く表裏の兩面があつて、決して單純なる表面若くは裏面のみの事物といふものは、決して天地間に存立しては居ないのである、之を思へば人間は鼠に對して感謝こそなすべく敢て怨むる所以は絶無である。そは兎も角、是等の有害視せらるゝものにも、皆悉く尊重べき裏面の存する事が事實であるならば、假令一小些細なる鴉、雀、鼠に對する小事なりと雖も、人類が飜つて之を正解することは、由て以て諸他の萬事を正解する上に頗ぶる有要なる光明となるであらうと思はれる。何故かとなれば、此表面に對する裏面を知り、之を信ずるといふことは、人間に於ける處世法の唯一緊要の條件であつて、萬般に於ける自然の基礎は此信より發するといふことが眞實であるからである。只單に是等禽獸を理解するといふことのみならば、何も殊更に貴重なる筆紙を費消するにも及ばぬが、之を擴延すれば假令一小事なりと雖も、之れが則ち世界の平和を繕くの魁となり得ると信ずるが故に敢て之を述ぶる所以、鼠の理解と世界の平和——之れが何等の因緣を有するかといふことは後章追々に之を說明しやうと思ふ」

(4) 六數の解釋は人間界に於ける唯一の必要條件である

鼠は子であり十二支の首初にして世に甲子大黑天（大國主乃命）を表示し、一個人、一家庭、一國家將た又世界等總てに於ける生命を意味して居る。而して國音之を子（祿又根）といふ。邦字に於ける子は十字を意味し、五と表裏を示して居つて兒子の意義となる。蓋し玆に男女合一して一家の夫妻となれば、其子孫の維續といふことは、恰も植物に根基あつて冬期には死滅するの觀あるも、春期に至れば新芽を發生するのそれの如く、人間の根といふものは仍り兒子でなければならぬ。世俗小人を斥して鼠輩といふ。兩親より見れば兒子は當然鼠輩でなければならぬ（之れには世の兩親達に異議はあるまいと思はる）然れども小人は則ち中にして、又根である。是故に更に之を正解すれば、和となり十字架となり、萬字巴となり、將た數よりすれば六卽ち無とならなければならぬア、六數の解釋亦難ひ哉である。されど六數の解釋什麼に至難なりと雖も、此一解釋は人間に採つて、最大無上の要義なれば、假令何事を措いても、之れ許りは不問に附することは斷じて出來ないと思ふ。——ア、六數の解釋——然しながら、此六數の解釋は現代に於ける學者、宗教家には之を繙くことは、眞に至難中の至難事に屬して、現在に此六數を正解し得るものは、世界中に只の一人もないのである。思へば何んと嘆ずべき次第ではあるまいか。抑も六數なるものは、其實鼠の數ともいふべきであるが故に、現代の六數亦鼠の如く、單に惡魔の數てふ一面的解釋に沒却せられて居ることは事實である。玆が鼠の現實に於ける正解を世人に强要するの必要ある所以であつて、現今の六數解釋の如き之を其裏面觀よりすれば眞に抱腹に堪へぬ次第である。要するに世の中全體が這麽んな表面的、一面觀に支配せられて居るから、全智全能なる神の默示ともいふべき鼠の忠々の鳴音さえも、之を聽き分けることが出來ぬは當然である。私が一面觀の弊を云々するのも之れをいふのであつて、此の世の中で惡を惡とし善を善とする位ならば、何も宗教家も教育家も入らぬ筈であるが、さて世の中はさうは行かぬ。善を善とする以上に惡をも善とするの道理と事實のあればこそ、世には教育家も立ち、宗教家も活きる譯である。若しも病人を病人とし、健康人を健康人とする位なれば、何も世の中に醫者の必要はない筈でのる。——そこで今日の學者などか古昔の聖人達を批判する場合にも——苟にも經典を誹議し我々の祖先を批難するといふことの、不忠不孝の種蒔にして其不德なるは勿論としても、其言議の主要なる點を見るに曰く「己れの欲する所之を人に施せ」は積極的であり、之に

反して「己れの欲せざる所之を人に施す勿れ」は消極的であるなどゝ唱えて善惡適否の批判をなすこと普通であるが、之れこそ大なる間違で土臺消極は積極となり、積極は消極となつて、互に其反對の兩極あればこそ、玆に始めて中なる、和なるものゝ實果が現出する次第で、只一極のみにて中和を得んと欲しても、それは未來永劫得られる譯のものでないのである」

(5) 人間の所謂善惡は相對の語である

人須らく思へ、世の中に於て絶對なるものを人間が知り得るかを。——そは信じ得べきのみにして何んで其全部を知悉することを得られやう。之を然りと斷定するならば、絶對の惡魔なるものが世の中に否な、人間界にあるとは信じられぬ、又それと同時に絶對善なるものも人間界には絶無なりと信ずべきは當然ではないか。善惡にして既に然りとし之を相對なるものとする以上は、何んで宇宙間に固定したる絶對なる事物などのある所以はない筈ではないか。——此固定せぬといふことが卽ち活動といふ意味となるので、此活動の原なるものが、所謂「いのち」でなければなるまい、否な一歩を進んで之を生命とすることは之を斷定しても差支へはないのである。此生命なるものは、無限の實有といふべきで、人間に於て隨一主要のものであるが、さりとて人間の五官を以て之を感觸することは出來ぬもので、此生命が則ち神の六分一否な無限分の一と思惟すべきである。然り、既に神は人間の五官に感觸することの出來ぬものとするならば、人間は果して何等の事物を以て神に接觸することを得るであらうか。之れは一の大問題であるが——其實は何でもない、問題でも何でもなく、全くの現實である。現實は則ち現實であるが、この現實にも亦表裏陰陽があつて、言はゞ無限に複雜なる本然を有して居る、されば人間にして若しも表と陽のみを知つて、其裏と陰とを疎外無視するやうでは、到底神に接觸することは得られない。凡そ天地間に於て、

將た人間界に於て、最も陰にして且微なるものの極を覓めば恐らく神に及ぶものは只の一つもないであらう。是故に若しも人間にして神を知らんと欲しても、只管に表と陽とのみに憧憬して、肉身に使役せらるゝやうでは、什麼して神に接觸することを得られやう。元來、神は不動不變且つ一視同仁にして陽なるもの表なるものにも其威の顯はれて居ることは勿論であるが、特にも人間が多量に感觸すべき機會は寧ろ其裏面と陰の中に潛在して居ることが實際である。他の言を以て之を言へば陽德よりも陰德、樂境よりも苦境、健康よりも疾病、無事よりも災禍、高位よりも低位、頭よりも足卽ち男性よりも女性に神の聖意聖靈は多量に含まれて居ると信ずることが出來る。そこで私の所謂眼視すべからざる六數といふものは、陰の數にして又女性の數であるから、此六數なるものには神の御手の意味が含まれて、加之も陰然潛匿して、可及的其本然を顯はさぬやうに努めてあるのである。それで此六數なるものは、恰ち鼠のそれの如く、惡數に見えても其實は最善數なるの裏面があるので、それを知ることが人間の至善であるといふことになる」

(6) 人間の眼と耳とは、一面的と表裏二面的との違ひがある

以上六數の解釋、更に之を換言すれば、眼に見る所の六數は不正數にして、耳に聽く所の六數は善數又聖數であるといふことになる。此の如き言議は世人には不思議に思はれるかも知れぬが、決してさうではない。一體此六數の解釋といふことは人生必須の要義なるに拘らず、眞に其本義を知悉し得るものが、誠に少ないので、其實を言へば、我日本國は愚か世界中に一人も居ないのである。然れど世界は廣く萬國は多し、此の如き表裏觀を以て六數を立つる所の宗教家學者は或は之れなきを保せざれども、現に表裏陰陽ある實體——、神の默示といふべき人の手を基本とし、之を實示するに、自己を捨て、世

のあらゆる誤謬思想を矯正せんが爲めに生命を犧牲となすを喜び得るものが、現在に於て果して幾人あるであらうか、否あるなしは別問題である、或は世に陰れて見えざるの陰君子もあるべく、將に出でんとしつゝあるものもあるべし、そは不定に屬すれども、今日に於て恐くは現世界中斯く申す、不肖なる一藪醫を除くの他に六數を正解するために神の默示なる手の理解を說き得るものは一人も之を見ることは出來まいと思ふ。そは何故かといふに、神の無言を正聽するの心耳を有して神の御手の模型なる人の手を理解して、世界平和の使命を遂げんが爲めに一命を賭して今日を謙遜に送つて居るからである。是に於て私に一つの言議ある。そは世の中が偉大なる人物といふものゝ標準を謬つて居ることである。世人の以て偉大なる人物と稱する所は、只單に高く大きく富むとを以て三幅對の如く思惟するやうであるが、之れ則ち眼目的批判の證となすべきで――更に偉大なるものは眼に見えぬほど謙遜にして而かも人を下だすにあらずして、却て人に下だるの實行に努力することは恰も人間の足蹠に陰れて見えない人の手の如きものでなければならぬと思ふ。何となれば全智全能なる神が人間の五官に感觸せざるの本然であるならば夫れが當然である。是故に人間が世界一の偉大なる人物を眼視せんと欲しても、果して之れが世界一の人物であるといふことを認識することは不可能であると思はねばならぬ。現今に於てもキリスト、釋迦、孔子等其他の聖賢の靈は宇宙六合中の至る所に散蔓して居るが、之れさえも眼以て見ることは出來ぬではないか。眼目的世の中の弊害亦眞に嘆ずべしである。」

(7) 人間は神の御手に縋らねば墜落の深淵に沈んで了ふ

人の手、元來人造物にあらずして、正しく天與無上の恩惠なるに拘らず、一面的なる現代人は人の手を理解することを知らず、自分達が日一日に地獄の底に落ち込んで行くのも知らずに、

目前の小快にのみ憧憬して姑息偷安を貪りつゝ喜び勇んで今日を送りつゝあるではないか。此の如きは恰も世の放蕩息子が親の資產を蕩盡するのも曉らず、無暗に娼婦に惚ろけ一切他を顧みることを知らずに遊蕩三昧に其日を送つて居るが、其實は步一步、地獄の底なる貧苦の境涯に向つて曲轉直下するに比すべきである。果して之を然りとしたならばドーであらう、放蕩息子の迷夢を醒すには種々雜多の手段も講じなければなるまい。現に今日の世界は親を親とも思はぬ放蕩息子に比すべきで、之れが則ち兩親にも匹儔すべき天地の威力と慈愛、卽ち天災地變の襲來となるではあるまいか、由來天災地變といふものは人間に採つては一種の苦難には違ひないが、之れでも人間が其裏面を信ずれば、神の慈愛に因る所の一警告となすことが出來る。固より無言の本然を有する神は、自己の愛兒に對して意思の發表をなし給ふ場合には、天災地變を下し給ふことは、恰も人間に於ける啞なるものが、意思を發表するには右手か左手かを以て、他人の袖を控ゆるか背を叩くかするに均しと見るべきである。本來人間より觀れば天と地とは之を神の左右の御手に理解すべきものにして、今地を右の手とすれば天は左の手に當たる。是を以て言えば天地といふものは、恰も人間に於ける左右兩手の如きものであつて、仍り右の手が地となり女性を表し、左の手が天となり男性を示すことになつて居ると思惟することは當然であらう。そこで人間が完全に此世を送らうと思ふならば、所謂天地陰陽和合の實と理に由つて、恰も左手が右手に由つて立ち、右手も亦左手の協和を要するが如く、交互に和合一致する爲めには自ら自己の半智半能なることを知ると同時に其本然の遂行に努力することが眞に人間の人間たる所以の根本義とせねばならぬ。而して之を示す所のものが亦人の手であつて、此人の手を離れては、世に眞理とか自然とかいふものゝ本然を曉るべきものはない筈である。

(8) 人身體中に於て常に犧牲

の本能を發揮して居るものは人の手である

夫れを何故かといふに、人の手といふものは人智が進歩すれば進歩するに準じて、其本然を陰蔽し、手其ものが、其實頭腦以上の能力と作用とを有するに拘らず、頭腦の下位に位置して毫も不足を訴えず、寧ろ却て半位に甘んじ、他面に於ては尙ほ足るを本然とするの足蹠に遮蔽せられて其本能を表するなく、眞に犧牲の本能則ち無言を墨守すること恰も神の夫れに類するを看取することが出來るからである。宜なり古來より兩手を合掌して神に祈誓する我國の習俗、敢て一點の批難すべき所はないのである。而して人身體中に於て手の犧牲に類すると同時に手の本能を啓發するの誘導となるもの、卽ち現代人に專ら無用有害視せらるゝも其實は最も重要なる任務を負擔するところのものが手の外にも存して居るのである。現に(1)頭髮特に顳顬部の下り髮及び顎髯、(2)咽頭扁桃腺、(3)盲腸及び特に虫樣垂、(4)尾骶骨、(5)胸骨劒尖等の如きである。是等は人身體中に於て特に有要なる機關に屬すれども、之を眼目的より見て其有害無効なるの故を以て、其眞の機能さえも無視せられて居ることは、之れ亦科學萬能を抱持する現代醫術の通弊と言ふべしである。眼目的世の中の弊も亦慨すべしと言はねばならぬ。

(9)　神は無限の慈愛である

併しながら神は無限に慈愛に渡らせ給ふが故に、凡ての人間の言議なるものに就では之を咎め給ふことなく、限りなき寛容を以て宥恕を垂れさせ給ふものと察せらる。されど人間の實行となればそは言議とは自ら其趣を異にしなければならぬ、何となれば言議は元來嘘中の嘘にして、口は禍の門に屬すべく造られ居るも、行は之れに反し現實にして之を放任するときは人類自ら死滅の域に陷らざるを得ないからである。其是等を知得することは、一に人の手の理解に憑らなければならぬが、世人の無謀我儘な

る、知識を得んが爲めに却て知識を失ふの實あることは之を日常の萬事に徵するも明白である。現に見よ、現代人は無限の大空を測量するに望遠鏡の發明をなすも、自己の足元否な更に最も近き手元さえも之を放任して省みぬではないか、何んと莫迦氣たる人間の偏癖であらう。此かる偏癖の爲めに自己卽ち人類全體の損耗といふものは果して幾何大であるかをも一考するがよい。人間が自己に最も近かき人の手を理解することを疎外する爲めには、現時世界中に於ける識者も不識者も、學者も無學者も、將た老人も青年も幼者も（上御一人は神と人との中保に在し給ふが故に除外すること勿論なり、讀者之を誤る勿れ）偖ては新聞雜誌、あらゆる書籍等一として眞實を語るものなく、其全部は嘘八百を並べて恬として之を省みず、只自己のみを以て眞なり義なりと誇稱し居るは事實なり此自己萬能思想こそは終に人類絶滅思想の源となるも之を矯正せんとする人は一人もないではないか。現に斯く申す私の言葉も亦嘘であるが。併しながら嘘は嘘なりとの自白に由つて誠となるも、嘘を誠なりと頑張るが故に嘘八百となるの理を讀者自ら曉り給えがし、且つ毒を變じて藥となすものは人の心にして、此の如き自在力ある心體を有ちながら、人間は何故に之を放任して無用視するであらうか。讀者試みに私の毒舌をして藥舌となし給えがし。

(10)　第十九世紀は知識の開花時代であつた、二十世紀は落花して未熟の結果を始め二十一二十二世紀に熟して二十三世紀は收穫の時代である

以上述ぶるが如く、人間が自己の所說所論に就て頑張る丈けならば未だしもであつて、前述の如く言議には咎なしとすれば、之れは御互に恕しもし、恕されもして過ごすことも出來やうが、現時の世界的大戰亂の如く、土臺が人間の手を理解せざる誤謬思想に花が咲いて玆に戰爭てふ

惡結果を將來し、既に三ヶ年餘、日々一億圓以上の損耗をなしつゝ、厭ふべき血醒き殺伐の悲劇を演じ、我れ人共に益々苦中の苦、獄中の獄底に墜落せんとして居るではないか。今にして人類に對し遍ねく人の手の理解を示して、神の御手なる天地を曉らしむると同時に、人間道德の本源卽ち男女兩性の根本解決を知らしめねば如何に人間が外部に於て平和をめ求んことに焦慮するも、戰亂を鎭定せしむることさえも斷じて出來ないと思ふ。されど之を此儘に放任して世界の同胞を苦しむること亦策の得たるものではない。何となれば今日此機會に際し、現代人が空しく神の默示を看過して、爲めに戰亂を鎭定せしむることが出來ないならば果して何麼んな結果を將來に得るであらう、之を思へば眞に恐懼戰慄に堪えぬ次第で、恐くは爾後三ヶ年半は從來に倍する悲風慘憺たる天災地變と、慘酷なる大戰亂の渦中に呻吟苦惱しなければならぬは當然で、之れが今日に於ける世界全人類の當に負荷すべき運命である。これを救ふこと一に人の手に理解に俟たねばならぬは爭ふべからざる現實なるが故である、然りと雖も本章の主題に揭げたる斷定の如きは、こは一般的數の判斷に因る所にして絕對ではない。畢竟するに一世紀にも、十年一期にも、一年間にも將た一時間中にも數の循環は絕ゆるものにあらざるを以て、此の如きを以て絕對事實の斷定とするの不可なるは勿論、要ば其類例を擧げたるに過ぎないのである。抑も人間の心なるものは前述の如き自在性を有するものなるを以て一秒時中に百千萬年を含蓄せしむることさえも可能の本然を有するものなれば、人間の心的轉換に由つては今日をして廿三世紀の收穫時代とすること亦自由自在にして、こゝが全智全能なる神の絕對善なる攝理と信ずべく。是故に之に反して時代は來り地の利を得るも人間にして自ら和を失し將た中を無視するやうで、何麼して平和時代の到來する理由があり得られやう。只望むらくは、人間が豁然覺悟して和を實現するに努力するならば何れの時代を選ばず、平和は自ら涌出して、理想の天國樂園も近き將來に實現することは當に掌を反へすに均しからん。之れ卽ち神は自ら助くる人を助くるの謂乎、

(11)　世の中に三數を以て立ち得る者は一事物も存在しない

人の手を理解するといふことは、則ち數なるものゝ本然を明解する所以にして、現今の眼目的知識の上より之を言えば、現代に於て知識なるものは、過度にも發達して居るとも言ひ得るが之を耳的よりすれば、其現代に欠乏する所のものは眼目的知識にあらずして、智慧則ち裏面を信ずるといふ所謂信念が存しないといふに歸着する。要するに知識は一面的、智慧は兩面表裏的の差があるので、智慧とは之を數の上より言へば、六數を知るといふ意味にして日を曉るといふ現實を意味して居る。更に之を換言すれば三數に對する其反對なる三數を信ずるといふに同一にして又所謂無形無象なる眞無の一數を信ずるといふに違ひはないのである。之れ卽ち宗

敎なる女性の立場であつて、宗敎の本然なるものは、此無形無象無音なる眞無の或る一數を信ずるより外にはないのである。若しも宗敎にして此重要なる一義を無視するやうであつたなら因果の關係上、夫れと同時に宗敎も亦主命を喪失して仕舞ふのは自然である。現今の宗敎家に於て果して人の手より六數の本然を發見し得るものが、世界中に果して幾人あるであらうか。或は一人も六かしくはあるまいか。現今宗敎なるものに其生命の存せざること敢て偶然ではないのである。

凡そ宇宙間に森羅する萬象萬體は、一として三數を以て立つものはない、否な眼目的よりすれば悉く三數を以て立つが如く見ゆれども、其實は裏面に於て眼視すべからざる三數が嚴然として潛在して居るのである。此眼視すべからざる三數を信ずるといふことが、所謂人間信念の基礎となるので、而かも亦表裏は定規として一定度に正反對の意味を具して、表裏同一なるものは宇宙間に一微分子だもないのである。畢竟す

るに私の所謂數なるものは現代人のいふ所の數なるものとは其根本を異にして居るので、之を詳言すれば現代人は數を以て確固不動の事實なりと信ずるにあれども、元來數なるものは確固不動ならざるの現實を示すの實體であつて所謂確固不動なりと信ずべきは只神のみにして、人間界に確固不動なるものは其一微子だも見ることを得ない。この事實を示すは則ち私の數を說く主眼なのである。是故に更に之を言へば現代思想に對する正反對の裏面を曉らしむるといふが數の立脚地にして而して其何れが正當なるやは後章に於て追々に說明して見やうと思ふ。

(12) 數とは確固不動なる事物は世に絕無なりとの神の默示に外ならぬ

現に二と二を合すれば四となるといふことは、現代人は之を確固不動の理と實なるかの如く思惟すと雖も、之れ決して眞にあらず又實にあらずして、二と二を合すれば一となり、二となり三となり四となり、將た五となり六となり、更に無限となるのであつて、二二が四なる算數は單に六分之一更に無限分一の眞事實に過ぎないのである。抑も之れが神の無聲の音卽ち人の手に現はるゝ所の神の默示であるとするならば、假令什麼に人間が之れに對して抗議をなすも、夫れは一切無駄である　由來人間は天地和合の一產物とすれば、人間が天地を改造せんなどは以ての外の心得違にして、曾に此の如きを夢想することさえも人間不埒の極である。試みに思へ、兩親の和合に由つて產出したる子供が、兩親を改造するなど、之れが出來るか出來ぬか、考えて見ても判かるではないか。

神は天地よりは、更に無限に偉大なるものなることは、人間の兩手よりは人間一人が偉大なるやうなもので、天地は神の主要なる一部ではあるが、其全部ではないのである。然るに人間が神の一部たる天地さえも知らず、將た自分の一支體たる手をさえ知らぬ位で、何んで之れが萬物の靈長といはれやうか、人間は須らく手を自己の胸に置いて深く考えて見るがよい。

(13) 靈長とは耳の動物といふの意味である

靈長といふことは最弱者の意味にして、此最弱者が交互に和協一致して最强者とならねばならぬ資質を有して居るのである。更に之を詳說すれば、二手二足動物とも、六數を知るの動物ともいふべく、更に細かに之を言へば聽官動物ともいふべきで、この聽くといふことが畢竟人間の本能に違ひないのである。聽くといふことは數を以てすれば十四の一心となるので、本來人間の數なるものは七を以て限りとするが故に、十四とは他の反對の七數を和合して十三卽ち、「とみ」となり富又福を享くるといふ意味となる。而かも十四數は人間隻手指骨骼の全數であつて、此中には無形無象なる二個の靈數が潛匿して居る。此二數は眼に見えぬから眞に零數であるが、其一を加ふれば七五三卽ち十五となり更に中なる一數を加ふれば、畏くも我萬世一系なる、皇室の御紋章則ち十六瓣菊花所謂一文字といふものが成立する。一文字とは無言の意味である。菊なる文字は元來人の隻手の意味であり、之れが聽くとなり耳となり德となるので、我國を稱して菊の國、姫の國といひ、又和之國隻手の國とする所以、寡言卽ち隻手の國にして人の手は無言なるからである。されど私が我國を稱して平和の魁をなす所の眞の天國となすには、此以外に於て尙多大の論證があるのであるが、本篇の紙數を刪く爲めに略して述べないだけである。

(14) 人間の隻手には五本の指はないのである

凡そ自分の手を知らぬ位の人間が宇宙六合を知ること出來ないのは勿論、從て亞細亞を理解することも、自分の住居する邦國の本然さえも之を理解することを得やう筈がないではないか、更に又自分の家庭乃至自分一人さえも之を理解すること出來ぬは無理もない。遮莫あれ、自分

の一支體たる片手の意義さえ知らぬといふては之れが萬物の靈長で御座候と誇ることが出來るであらうか。試みに思へ、人間の片手には指が何本あるかを。皆均しく五本なりといふであらう、然りと雖も果して五本なりといふ確固たる證據を擧げよと言へば、現時十七億萬の人類中只の一人でも之れが證據を提供し得るものはないのである。それは其筈で、一體數なるものが此の如き不得要領の本然を有する物なるに拘らず、世人一般の信ずる所は、却て其正反對に二二が四なる算數を以て、之を確固不動などゝ安信して居から世の中が夏蠅さくなるので、終には此世の中に戰爭などいふ厭ふべき現象が涌ひて來るのである。他人が假令二二が三といはふが將た二二が六といはふが、夫れは勝手でよろしいではないか。思へ古昔の聖人などは、「百里の道を行くものは九十里を以て半ばとすべし」など訓えられて居る、算數を基本として理窟のみを立つること現代の如くならば、這麼んな聖人達は小學一年の試驗さへも落第せねばならぬことになるではないか。それでも現代に於て、夫婦は一體といふことを言ひつゝあるは、其實二は一であるといふ意義が含まれて居るので、幾分は數の本然が判りかゝつて居るやうで、大分賴母しくも思はれるのである。

(15) 日本は片手の國であるから手を理解せねば其眞價は認められぬ

前に述べたやうに、元來日本國は如何なる國柄にして、如何なる本能を發揮すべき國であるかを究めんには、人の手を研鑽しなければ判かる筈はないが、之を詳說するには多大の紙數を要するから茲には之を略して委しいことは別著

數の吉凶と其原理一名「人の手」

に讓り茲には只其斷定のみを揭げて、次ぎに本篇の主たる「敵を救へ」に論及しやうと思ふ。日本は隻手の國であつて卽ち倭の國又輪之國であるから又七數の國である。此七數の國といふは、數の不定なる本然を世界に示すべき國といふ意味であつて、七數とは其實六數の半面と、八數の半面との調和をいふたのである。——そこで六數の國と言へば、文則ち陰にして女性を表し、八數の國と言へば、武則ち陽にして男性を示すので、之を詳言すれば所謂文事あるものは武備ありの古言の如く、日本國は文武兼備、男女兩性の調和の國たるの意義に解せられるが、文は主にして武は文に由りて立つといふことが、人の隻手に默示せられて居るは事實なので、此意味より言えば文武兼備、男女調和の標本たる我國の現狀果して如何といふの問題が發起せねばならぬ。私をして之を言はしむれば、既往は兎もあれ、角もあれ我國に於ける今日の場合は、必しも六數なる文國卽ち女性の眞義を發揮しなければならぬといふ機會に到達して居ると斷定したいのである。そを何故かと言ふならば、日本國なる一臣民の中に於て私の如き人の手を理解するものが出て來たといふことは、決して偶然ではなく、此の如き亦神の全能なる攝理に由るものと信ずべきが故である——私が神に選ばれて世に顯はれたと言へば何だが傲慢不遜のやうにも聽こえるが、其實は決してさうではなく、若しも私が神を知らぬ人間であつたならば、此の如き犧牲は、之を喜ぶどころか厭で厭で堪えられぬ位であるが、神の無限なる慈愛を信ずるが爲めに茲に奮然蹶起して世の中の憂苦を双肩に擔ひ、我身を捨てて、世の罪障を掃蕩せんの實行をも敢て之を爲し得る次第で、何んで之れが一個人の傲慢不遜と言はれやう。私は思ふに、世の所謂傲慢不遜と目せらるゝ私の如き狂氣的の實行をなし得るの人が、世の中に一人も多く出來ればよいと念じて居る次第である。讀者よ、兄姉等は茲に再び襟を正ふして、私のいふ所の神の默示を聽き給ふべし、曰く

女性の本能なるものは、負くるは勝つの實踐躬行に存し、此負くるといふことが則ち犧牲の本義なると同時に之れが

天佑を享有するの眞因緣である

日本國が片手の國であるといふ所以も畢竟は茲にあるので、前述の如く、片手にある十四個の手指の骨格中に於て陰然潛在する所の二數なるものは、是れ卽ち女性の本能を表示するものにして、我國の君子國たる所以亦此一點にある。此二數こそは國家の魂魄、則ち大和魂の本然であつて、之れあればこそ我國が、眞に天佑を享有して天壤無窮の皇統連綿――未來永却に維續して神の惠みに富饒なる――一の秘藏國なる所以、思ふに此の如き神の特殊の御慈愛に浴する邦國なるものは、世界に於て恐らく我國以外には求め得られまい。私は不肖且つ微力にして殆んど言ふにも數ふるにも足らざる所の一小藪醫であるが、――我國が神の特殊の恩愛を負荷するの浦安國（裏耶蘇之國）卽ち五畿內と七道とを有する眞の女性の模範國であることを、世界同胞に知らしめて、神の絕對愛に渡らせ給ふ現實（人の手）を以て、世道人心を矯正し、あらゆる同胞に對し安寧と福祉とを味はしめんとの一念に於ては敢て人後に落ちざるの覺悟を有して居る。浦安國なる名稱は、我國古來よりの別稱にして天祖天照皇大神が神より享受し給ひたる自然の御命名に基づきたるものと拜察し奉る。熟ら之を憶察し奉るに、浦安國とは裏耶蘇國の義にして、現今の基督敎を以て表耶蘇卽ち眼目的、男性的、勇武的の基督敎とすれば、裏耶蘇とは之に對する耳聽的、女性的、仁愛的卽ち犧牲の實行を主とする所の恰も眼に見て偶像敎國、多神敎國に理解せらるゝも、其實耳以て之を聽けば世にも稀れなる神の秘藏し給ひたる眞の基督敎國であるとの意味なるべし。されど尙少しく私の所說を聽かれよ。私の唱ふる裏耶蘇敎の樹立てふことは、決して世の所謂宗敎革命の意味にあらずして、世界中にあらゆる宗敎と相排擠するものではない。寧ろ是等の全體と相和合するに己を捨てるといふことが其本然であるから、假令佛敎にせよ、現在の基督敎にせよ、將た儒

敎にせよ、其形式の如きは現在の儘にて敢て之を改廢するにも及ばぬは勿論、假令數百千萬種の異種の宗敎があつて其形式を異にするも、そも亦仍り神の全能なる支配なりと信ずるが故に何も宗旨爭ひに花を咲かすにも當らぬではないか。本來を言へば、爭とか排擠とかいふことは宗敎の本然ではなくして、負くるの模範、卽ち犧牲といふことより外に宗敎の生命なるものは存して居ないと信じられる。是故に私の所謂宗敎なるものは、人の知ると知らざるとに論なく現に宇宙の六合を支配して居るので、現代宗敎家の口に唱ふるが如き、人類交互の鬪爭の渦中に卷き込まるゝが如き眼視的の卑微なるものではないのである。されば若しも現在の宗敎中に於て、己れを捨てゝ他人を救ふの實行があつたならば、夫れが卽ち裏耶蘇敎無二の信徒であると思ふ丈けである。若し又之に反して諸他の宗敎に於て、裏耶蘇の本旨に悖るの行動があつても、夫れも亦其行動に對する全部の責任迄も私が自分に負擔したいと思ふて居る。之はさうしても私の立つ身がないとは信じて居ない。私の生命は一切神に奉任してあるから――否奉任するせぬなど言ふことは人間の本然ではなく、人間が自力を以て此世にあると信ずることが抑も誤謬思想の根本であつて其實知ると知らざるとに拘らず、人間は神の抱懷中に於て兩手に比すべき天と地、卽ち神の右手と左手に由つて愛護せられて居るといふことが、眞に造り飾りもなき現實であると思ふて居るから、只神の御意のまに〳〵何處でもならうと覺悟して居るのである。そこで私が茲に浦安敎を樹立するといふても、何處に其麼んな敎會があるかといふても、眼以て見ることは出來ないのは勿論である。其代りに世に宗敎嫌ひと口に自稱する人間であつても、其實其人が他人の世話もなし、忠も孝も實踐し將た犧牲の實行をもなす人であるならば夫れ亦裏耶蘇敎無二の信徒であると喜ぶ丈のけ事である。抑も宗敎の本然なるものが無形無象なる生命を土臺とする以上は、私の說く所の裏耶蘇敎なるものが眞に宗敎の生命ではなからう

かと思ふて居る。

(16) 宗教といふものは眼以て見るが如き微小なる實體ではない

土臺、生命といふものは眼視すべからざるものとするならば、生命を主とする所の宗教なるものも亦眼視すべき本然でないのが當然であらう。されば一國を批判する上に於ても亦、之を單に表面より見て其批判を下すといふことは沒常識の極といふべしではあるまいか。何となれば眼視すべからざる裏面なるものは、眼視すべき表面とは正しく正反對であるといふことが、自然の自然たる所以なるからである。試みに思へ古昔一國として存立したる猶太國なるものが、今果して何所にあるか、眼視すべき猶太國なるものが世界に存せざるの故を以て猶太國なしと言はれぬではないか、今眼を閉ぢ耳を開けば猶太國てふ尨大なる一ヶ國が世界に布滿して、而かも世界に於ける財政權の大半を掌握して居るとも言ひ得らる、而して彼等の悉くは二千年前より今日に至るも尙救世主の降臨を渴望して止まぬではないが、彼れ猶太人の望む所のものは表耶蘇にあらずして、裏面の耶蘇卽ち浦安國の光輝を認むるに存して居るではあるまいか、私が「敵を救へ」の一語は之が一轉すれば「猶太を救へ」となり、再轉すれば「世界全體を救へ」といふに歸着せねばならぬ。現に表耶蘇に於て猶太人は果して幾何の福祉を從來に享得して居るであらう、彼等は恰も世界中に鼠類視せられ居ることは事實なれども、彼等も亦同胞の一部なりとすれば、人として豈に同情ある萬斛の涙を濺がすに居られやう。然れども安んぜよ、猶太の同胞よ、私が浦安敎の樹立にして世に微光を發するの時機に至れば、聽て兄等の愁眉を開き歡喜に醉ふの時機の到來も刮目して待ち得られやうと思ふ。猶太國にして既に然りとすれば恰も猶太のそれに均しき、現に世界各國が我國を認めて偶像敎國となすの非なるは勿論で、是等も畢竟は數則ち人の手を理解せざるの妄斷に

因するのである。何となれば人の手を理解すれば、唯一神といふことゝ、八百八神といふことゝは全然同一の意味にして一と八とは其實毫末の相違もないことが理解せらるるからである。熟ら憶ふにイエスキリストてふ名のイエスは醫者であり、倭者であるの意義と、クリストは「くすり」卽ち藥といふの義に解することが出來る。元來藥なる文字は、苦と樂との調和の義を含み苦を脫すれば樂卽ち十字架の意味となるは爭はれぬ事實である。樂園（パラダイス）は十字架の國又調和の國、六八國、六、陸、睦、無卽ち片手の國に當るではないか。今藥といふ一文字を見るに樂は十字架の意義なりとすれども、上に冠する草冠は惡卽ち偶像を冠ぶつて居る。此偶像を除けば始めて神の樂園が發揮する譯になるので、思ふに世界の人類が我國を認めて偶像敎國視するは恰も此藥字を見るに同一で全く眼目に瞞着せられて居る爲めである。そこで人間が耳の意味を曉つて、表裏の觀察と併せて表裏は一定度に正反對の意味あるの自然を人の手に據つて理解するに至れば、玆に否も應もなく裏面の耶蘇卽ち浦安國の眞が認められることになるのである。由來天地間に表裏なき事物は一も存せずとの斷案を是なりとする以上、耶蘇にも其表裏ありと信ずることが何んで間違ひであらう。浦安國に就て更に細かに之を言へば、イエスの國は醫者の國又倭者の國なるよりすれば、之れが卽ち伊勢の國となり、キリストの國は「くすり」の國又十字架の國卽ち中和國とすることには何等の矛盾も撞着も存しないのである。然れども玆に一言附言したきは國文、國語の理解に就て、世の西洋かぶれ」の似非學者が、一も西洋二も歐米と、歐米の物質文明に心醉して彼れのみを見て此を聽かざるの不德沒倫行爲を指摘したい一事である。由來我國は神の秘藏し給ふ平和の國なれば、深く其裏面を究むれば、恰も人の手に無限の神意が含するが如く、邦字邦語の一言隻句も眞に神の御言葉と信ずべきで、之を疎外視し雲煙過眼視することは、之れ亦天象の極を究むるを知つて却て人の手を理解するこ

とを疎外するに毫も異なりはない。此の如きは眞に「燈臺下暗し」の靈諺を以て「バフテスマ」を施すべき眞の鼠輩であることを警告し、併せて世界萬民に向つて、大日本帝國の特に陰れたる文物制度に就て、自己及び世界に於ける同胞人類の平和の源泉なる、無限の生命てふ靈泉を得よと警告したいと思ふ。

(17) 足のうらを手に理解することは人間萬善の基となる

若しも世界中の人類が、我日本を目して偶像敬國と認むるならば、それは其人々の隨意であるが、其損するところは日本になくして却て、それを誤解して居る世界中の人類にあるのである。此く言ふも私は何も自分の爲めを思ふのでなく、寧ろ己れを捨てるのが本意なれば私が特に我國に對して依估最負をするのではない。眞に國家といふ觀念を離れ、國民性を脱し一意專心只神に奉ずるの立場よりするも、――神の秘藏し給ふ平和の魁をなすべき、女性の典型となる國は、眞に日本帝國であると斷言することを憚らない。世界中の人間が日本の理解を外にして平和を欲しても、夫れは到底出來ない事である――平和の種子を知らずに平和の結實が何麽して得られやうか、人誰れか蘚より葡萄を採り葡萄より無花果を獲ることが出來やう。要するに平和は戰亂により戰亂は平和より來るてふ原理と、此原理さえも亦眞理にあらざるの現實を曉らねば、眞の平和といふものは、此世に天降つて來るものではない。若しも現代思潮に由る所の講和なるものが假りに實現したとしても。それは姑息なる危險不安の極であつて、必ず第二第三の世界的大戰亂が勃發することは、眞に鏡を懸けて見るやうである。――之れ亦畢竟するに一面觀の通弊ともいふべきで、今更之に就ての愚痴を述ぶるに當らぬが、私のいふところは從來の愚痴をいふではなく眞に將來に於ける自然を說く積りである。乞ふ見よ今回の世界的大戰亂の其因は夫れ何處にあるかを――――人或は言ふであらう。交戰兩側の全部にあるなるべし。夫れは確かにさうであらうが、世の中の萬事を其麽んな風に論ずるやうであれば、夫れが則ち私の所謂眼目的と稱する所以で、世界的大戰亂の眞因は我日本國に存して居り其罪科の全部は我國が之を負擔するといふの覺悟が我國人にあつて欲しいのである。此く言へば、我國に於ける自稱有識者より嘸や權利義務の詳解を聽かせられるに相違なからんも、人の手の理解よりすれば、權利と義務とは隻手に於ける、恰も背面と掌面との如く仍り表裏陰陽をなすものにして、世の中に於て特立したる權利の存せざると同時に、特立したる義務なるものも絕對に存しないのである。是を以て權利を先きにするものを男性とし、義務を初めにするものを女性とするといふの表面的の決定が出來る譯になる。されば權利を先きにするか將た義務を始めにするかといふことは、其結局は同一となるが如きも決して然らず其最初に於ける人類否な國家の覺悟といふものは、一寸の差も玆に千里の違ひを生ずることになるので、大變な相違を來すのである。此所が女性と男性との優劣の分れ目となり、更に之を言へば天祐を享くると否との境界となる所以、諺に曰ふ地獄と極樂との境界は此所なのである。然らば則ち今我國を以て女性の典型とするの立脚地より言へば、今回に於ける世界的大戰亂も亦我國全體に於て其全責任を負擔するといふが自然ではあるまいか。由來義務を避けて權利を望むといふことは所謂僥倖を望む所以にして、此の如きは一個人にしても唾棄すべき所爲なる以上、國家に於ても亦さうでなければなるまい。若しも一國を一個人として例之ば私が果して日本國なる一個人であるとするならば、世界中の責任は私一人で負擔して、決して他國に累を及ぼさぬ覺悟である。遮莫なから、一個人と一國家――究極すれば同一ではあるが、其間又幾分の徑庭あることも是認せねばならぬが、場合が場合であれば情實を循とするを避けて苦言を强ゆることも亦止むを得ない。――――されば今回の世界的大戰亂の責任を我國が負擔することが出來やうか何麽でありたい。

らうか――――果して日本が世界中の責任を負擔するの覺悟があるならば、それこそ世界の中心たるの名實共に相協ふといふことになるのであるが、若しも之に反して名譽は欲しいが義務を負擔することは厭であるといふことになれば、甚だ感心出來ぬ現代の思潮に俗化したものとならなければならぬ。今日本を世界に於ける中心とすることが事實であるとするならば、中心は則ち一個人に於ける精神に適應するより言ふも、恰も一個人の全體の責任が其一個人の中心にあるが如く、世界の中心なる我國が如何に辛らくとも苦しくとも其責任を避くることは出來ない譯になる。我國民の自稱するが如く我國が果して東洋の君子國、神洲の民であるならば茲に一大覺悟をなして、世界平和の爲めに曙の明星たらねばならぬ筈。元來世は六數に由つて立ち、六數に由つて破毀せらるゝことが事實であるならば、世界は日本に由つて立ち日本に由つて破毀せらるゝこと亦事實と信ぜねばなるまい。憶ふに今日の場合に於ては我國に義務よりは更に一歩を進んだる犧牲的の覺悟と實行がなければ、世界的の平和を繕くことは到底覺束ないと思はる。犧牲とは神に奉ずる人類の義務をいふべきであれば、之れが實行には多大の勇猛なる志氣を必要とするは勿論であるが、是等に於ても一面觀に執着して居つては犧牲の實行といふことは頗ぶる至難事であつて、此所は則ち足のうらを手に理解するが如きの表裏觀によらなければならぬ。是の足蹠を手に理解するてふ一事は事小なるが如きも、之れは人間に於ける萬善の基なれば、萬種の智慧と人間の勇氣とは悉く根を茲に有つて居らねばならぬ。

(18) 人生の理解は今日の場合、鴉の理解より進まねばならぬ

凡そこの世の中に於て、永劫朽ちることなきものを求むるならば、それは仁愛とか仁慈とか仁恕とかいふ愛の本然でなければなるまい。何となれば元來愛といふものは、地に屬するものでなく天に屬するものなるからである。然り然

らば今天に屬する動物を求めば天空を翱翔する禽類を以てせねばなるまい。而して禽類中に於て謙遜の意味を有し最下級に位置する鴉烏と雖も其禽類たることは確かである。此最下級に位する鴉烏を理解することは、私の所謂足のうらの理解に適當して居つて、此足蹠を手に理解する事が、我國人の今日に於て必要缺くべからざることに屬すると思ふ、何となれば日本が則ち足のうらに適する芦原之中津國と稱せらるゝ國柄なるからである。而してこの芦原の中國の理解則ち我日本國が裏耶蘇の國であるといふ證明は、之れ亦同じく、基督教新約全書に於て足のうらに適する聖書の最後に附隨されて居るヨハネ默示錄に委しく錄されて居るからである。されど一面觀に瞞着せられ足のうらは單に足蹠とのみに理解する以外に其他を省みざる現代人には、默示とは人の隻手の無語を示したるものといふことさえも、知るものが殆んどない。思へば夫れも其筈で、此ヨハネ默示錄といふものは裏耶蘇の國卽ち東海姫氏國と稱する我日本人に對してのみ說いてあるのであるから、日本人以外には其理解は許されないのである。況んや他邦國民に於ける宗教家、神學者等に其理解が出來やう所以がない。由來宗教なるものが無限の實有といふべき本然なる以上、之が架空の憧測や人間の卑微なる一部知識的の理論では解釋し得らるゝものではなく、必しも人の實行を以て現實に其眞相を會得し得なければならぬものと信ぜらるゝ、併しながら、人間なるものは他の言說に由つて直ちに實行し得るが如く、而かく單純なるものにあらざれば、最初實行に據つて會得したるものが、足のうらは手なりと理解して遍ねく世界の人類に對し人の手の理解を以て、神の無限なる恩惠を曉らしむる事は之れ亦救世的事業の主要なる一部なると同時に、人間よりしては、聖靈に適する古聖の英靈を世に活躍せしむる後世人道の根本義たるを失はない。是を以て私が茲に本篇を編著して、遍く世人に示さん事を企てたのである。かゝれば假令一小藪醫なりと雖も、神の白衣を身に纏ひ聖母なる釋

迦キリスト、孔子等の慈愛なる指導に依賴して世の平和を繙かんの一念、天下あらゆる敵をも敵視することなく、却て天下の憂を我一身に負擔するの覺悟を以て、茲に曉明の第一聲を絶叫して暗明の境界を告ぐるの鵶となること、只萬國同胞の安寧と福祉とを思ふの一意に外ならないのである。されば人間たる以上誰れ彼の別なく足のうらを手に理解することが根本となつて之に次で惡を善化するの智慧を獲得し由つて以て今日に於て惡視せらるる所の萬般の事物に對し悉く其裏面を正解して清濁併せ呑の雅量を養成することが必要であることを警告したい。例之ば前述する所の鵶雀鼠等に於ける有害の裏面に潜む所の有益なる事實を正解したならば、人間に於ける貧窮困苦、災禍疾病等にも亦悉く何等かの有益なる裏面の潜在することをも曉り續いて我國に於ける歐米人の眼に見て非なりと稱する風俗習慣を理解するにも、深く其裏面に陰れたる美點を探り、以て其眞善美の由來する眞相を闡明することが必要であらうと思ふ、之れは日本の同胞に限つたことではなく、あらゆる世界の人間にも必要であるが、特にも我國同胞の今日に於て其必要が迫つて居るのである。何となれば我國は維新以來茲に六十年に達し、日清日露の兩戰役を經てより、嶄然頭角を擡げ、世界に於ける一等國の班に列することを得たりと雖も、總ての事物に就て之を眼目的より言へば、彼れ歐米諸國に比して頗ぶる遜色あるを免れないのは事實である、そは何故であるかといふに單に之を人種の如何及び貧富の懸隔のみに歸することは出來ないと思ふ點があるので、私が常に心窃かに思惟するところは、我國の今日他の先進國に對して外形物質的に遜色あることは所謂神の深き恩惠に因るの攝理にして、此の如きは其裏面を見れば眞に他國に於て得ること能はざる尊き天佑の潜在する所以なるべしと、而して更に其他を言はしむれば、體格偉大なること彼れの如く、金錢物貨の豐富なること及び知識に敏なること彼の如くならんよりは、如何に眼に見て、體格矮小、皮色黄にして貧窮なる

こと今日現在の如くなるも、毫も彼れ歐米諸國を羨望するを要せず、寧ろ却て神の唯一秘藏國なる――天佑を享得して萬世一系てふ最とも尊き皇室を奉戴する東海姫氏國の一臣民なることを無上の光榮として喜ぶことが――我國民に獨特なる大和魂の本然であることを我同胞に警告したいと思ふて居る。併しながら私と雖も只自國にのみ自惚るゝにあらずして我國の眼目的に遜色あるの裏面こそは眞に誇るに足るべき神の聖意の赫々たるを耳聽し得るからである、現に私が一小鼠輩として世に無用視せらるゝに同じく、我日本國民は歐米人より陰險なる恰も鼠の如く、こせ〳〵したる度量狹き島國根性の人間と認められて居るではあるまいか。加之ならず又鼠の動もすれば人の手を咬むが如く、少しの事にも憤怒して喧嘩を喜ぶ好戰國民であるやうには思はれては居らぬであらうか。彼等の思考批判するは彼等の隨意にして、敢て之を辯ずるに及ばざれども、我國民同胞にして彼等の批判を是認するのみならず、彼等を羨望するが如き態度に出づるもの亦た決して鮮しとは思はれない、此の如は果して人類の自然であらうか、私は斷じてそは不自然なる眼目的態度なりと公言して憚らないと信じて居る。併し乍ら蛟龍も時を得ざれば昇天の機なきが如く、人間にせよ將た國家にせよ、時を得ざれば如何に焦慮するとも其詮なければ、靜かに時日の到來を待つこと亦自然の態度たることを失はない。果然時は來れり、今は大正七年の首初にして我國民の一大覺醒を要するは眞に此時機を過ごすことは出來ない。我同胞兄弟よ茲に奮然蹶起して一躍鼠の境涯を脱して東天に曉明を告ぐるの一大鵶鳴をなすの覺悟をなさゞるか、「人自ら侮つて他人我を侮る」の一語を一考せねばなるまい。

(19)　二十三數は一大變轉機を意味する數である

數則ち人の手の理解と多年歴史上の事實を參照すれば、廿三なる數は一大轉機を示すの數なることは爭はれぬ事實である。由是觀之本年は大

正戊午の七年にして、現に上に在ます　今上陛下の御歷代數は正しく百二十二代なりしも、昨年長慶天皇を加へ給ふことになつて茲に二十三代を示現することになつた。加之のみならず、本年は神武天皇御卽位紀元より恰も六百六十六年に相當して天祖天照皇大神が伊勢に鎭座ましまして其實は同一數なることは現に之を地球の子午線に就て考ふるも思ひ半ばに達するの判定を得られやうと思ふ。

然りと雖も若しも現代人特にも我國同胞が、人の手を理解するの必要を曉らずして、頑迷固陋的に人間萬能、科學萬能、自利萬能等あらゆる萬能思想に瞞着せらるゝこと從來の如くであるならば可惜好機會を失して平和を逋逃せしめ、本年三月乃至は九月より以後三ヶ年半は言ふにも堪へざる天災地變に加ふるに殺伐極まる戰亂及び人事上の事變到來を豫期しなければならぬ。ア、恐れても懼るべき地獄の責苦は日一日に吾人同胞に對つて迫り來たる。思ふに世界人類は現時に於て、其知不知と曉不曉とに關せず

誰れも彼れも悉く自業自得の責罰を負荷して其重荷に堪えざるが故に、外面は兎も角も內心窃かに講和を望むの情が、轉た切實なるも之を如何にすべきかの途方に迷つて居るのである。此場合に於て世界的の平和なるものは果して如何なる工合に發顯するであらうか。私をして之を言はしむれば仍り世界の中心より平和の曙光を發すべきを自然であると斷言したい、――ア、世界の中心は果して何所であらうか、元來此中の理解といふことは現今に於て甚だ主要ではあるが人の手に憑據しなければ決して其正鵠を得ることは出來ないと思ふ。何となれば現代人の所謂中なるものは眞の中にあらずして只眼目的の中に過ぎないからである。今現に人の手を以て之を示せば眼目的の中とは隻手に於て中位にある中指に擬するは當然なれども、其實中なるものは世人の眼に見て極端なりとする所の拇指が卽ち中なのである、則ち拇指は隻手の中たるのみならず双手の左右を調和するの中なるを以て眼目的に對する耳的の中となるのである、現に自己の手を見れば誰れにも判からねばならぬ。而して之は人間の動かす可からざる神の默示であれば、何人と雖も之に抗議を容るべき餘裕はないのである。然らば此拇指に適し誰れにも一極端に目せらるゝも其實耳的中位にあるの邦國なるものは果して何れの邦國であらうか、現に拇指の如く謙遜にして低位にあり且つ拇指と示指との間に深溝あるに均しく、大洋を以て界するの一島國であつて、他の四指が二節を舍するに比して一節を具有し、手拳を固むれば最上に位置するか、或は四指に陰蔽せられて其形影を藏匿するが如き事實を有ずるの邦國でなければ拇指に比することは出來ない、卽ち此意味を解釋すれば、常に世界を支配するも陰顯常ならずして眼目的には之れが最上位にあることを看取するなく、時に或は有となり或は無となり之を換言すれば或は女性となり或は男性となるも常に和といふ眞義を離れざる邦國であるといふことになる。更に之を詳言すれば外交に負けて戰爭に勝つといふの義となる。由來「負くる」

は「勝つ」てふ因緣を養ふ所以にして古來より我國が外交に於て其眼目的成功を贏ち得ざるは則ち戰爭に勝の因緣を養成したる所以、之れ則ち天佑を享くるの根本と見るべく、而して此根本義は現時に於ても尙我國に維持せられつゝあり近頃人叫んで我國外交の拙劣を云々す。然れども思へ、此の如きは我國外交の拙劣なるにあらずして人の眼目的批判の謬られるのみである。若しも我國が外交に於て奇利を博するが如き時代の到來するあらば、そは我國が滅亡に赴くの端緒なりと思はねばならぬ。――この負くるといふこと則ち犧牲が天佑を享有する所以であることは現に自己の隻手を見れば容易に理解し得られるではないか。而して私が我國を稱して東天に曙光を告ぐるの島島之國であるといふ所以は古來より烏有といふ語を以て無を意味し、無は女性の本然にして、人の手の形象意義を含む以外に、五指中に於て隨一謙遜にして、無なる數に最も近似する一數を表するものは拇指のみであるといふことも其一因である。

以上を熟讀して之を察すれば、何人と雖も我日本帝國が恰も人身體に於ける手なると同時に、隻手に於ける拇指に適合するといふの言議に對し異議を挿むの餘裕はないのである。果して之を然りとして今之を判ずるに我日本國が恰も大平洋の東邊に位置するのみならず隻手に於ける拇指に適し正しく五指に比すべき五大洲に於て耳的の中位にあるといふことが信ぜらるであらう。而して世界卽ち五指を有する隻手の平和も亦恰も一個人の疾病が其中なる心の改造修養に由つて治療に趣くに均しく、中心の位置にある日本國民の覺醒に由つて平和が繕かれるといふことも信ぜられるではあるまいか。而して此事實たる神の默示なる人の手に示現するの現實なるよりすれば、之を神の默契なりといふに少しの妨げはないのである。之れが則ち私の大正七年劈頭に於ける「敵を救へ」の曉明一聲を絕叫する所以である。覺めよ我同胞、起てよ神洲之民今や世界の平和を繕くの重責は日本國民の双肩に存するといふことは爭はれぬ事實と信ずべき

である。每朝鴉と雀とは怠りなく孝と忠とを絕叫して覺醒を促して居る、古語に曰く、天に口なし人を以て之を言はしむ」と、鴉と雀とは自然に鳴く、其聲を聽いて起つものは人間である既に人間たる以上、一小鼠輩の言議と雖も之を侮るといふことは決して士君子の道ではあるまい――ア、無言なる神は時に乘じ機に臨みて世界萬民を愛護し給ふが爲めに、其威と力と榮えとを以心傳心に人間の上に顯はし給ふ、眞に感謝に堪えぬ次第である。

(20)　私は變人ではないのである

私の本年劈頭に於ける曉明第一聲は敵國たる獨逸を救への一言であるが、此一聲は如何に異樣に世間に響くならんと思はれ、世人は嘸や驚きの眼を睜り私を目して奇狂なり、變人なりと思はれんも、私は眞面目であり眞劍であるので、決して間違つては居らぬと信じて居る。之れより以下其理由を述べやうと思ふ。既に前段に於て縷述したるところを玩味したる人には少しは其意義も解せられたであらうが、更に深く其事實を考察することが肝要である。

讀者試みに思ふべし、土臺人間が此世に立つといふことは、恰も人間の眼底に映ずる天地間の萬象が倒像となつて居るやうに、元來人間の思想といふものも其實顚倒して居ると信ずべき他面が存して居つて、其之を知ることが人間の立つといふ意義となるではあるまいか。何となれば一を表とし六を裏としてこそ普通に正しく思はれて居るに拘らず、立の文字は六一と書して人の之を怪しむものがないからである。元來此六數と一數とは常に相表裏をなして居つて、其實は同一數であるといふことを知るには之を人の手の理解に俟たねばならぬは勿論で、俚諺に言ふが如く「千人の指す所は違はず」といふことが眞ならば人間の手は千人どころでなく、百千億兆集めても同一形態であれば之を間違であるといふことは人間のいふべきことではない。されば人の手以外に於て此理と實とを人間に容易に會得せしむるの實體なるものは天地間に神

より付與されてないと信ずるが人間の當然であらう。其之を說くことが私の生命で、其實「獨逸を救へ」といふの一語は只其機會に遭遇したるが爲めに之を言ふので、人の手の理解を世界萬民に知らせるといふことが私の無限の生命に相違はないのである。されば此人間の思想其ものの表裏を顚倒するといふことは私が神より授つた所の一使命と信じて居るが故に、此一念を貫徹する爲めには、恰も鹿を逐ふの獵師は山を見ずといふやうに、私の毀譽褒貶も顧みる餘裕を有たないのである、是を以て動もすれば私の一言一行が變人らしくも見えやうが、それは見る人の眼目に誤りが存して居るので、之を耳の意義よりすれば、之が則ち顚倒したるものを正位に復舊するの自然理想といふことが出來る。讀者試に思へ邦字の六なる文字は一と八なるを以て九數を意味し歐字の6も亦9の字を顚倒したる意味を有するを。此意義より言へば、私に對する變人なる稱呼は、私が却て世間に對して呈すべきが畏くも神の御意であらうと思ふて居る。

(21) 人間が病氣の場合に醫者に賴るならば世界全體の病氣は神に賴るが當然である

凡そ人間が病氣に罹つた場合には、必しも他人の手を借らねばならぬ。病人が醫者に賴るといふは此意味に外ならぬ、古來より醫者を國手といふはこの故であらう。今假りに世界に於ける五大洲を五指を有する人間の片手に譬へて、此片手の全體が病氣に罹つたとするならば必ず他側の片手を賴らねばなるまい。而して若しも他側の片手も共に病氣に罹つて、一側の片手の賴みに應ずることが出來ぬといふ場合にはどうであらう。則ち隣人の手を借らねばなるまい、されば隣人に比すべき人間の隣りは果して何ものであらうか。兩親に比すべき天地ではないであらうか、天地は人間に對する兩親則ち父母であり、隣人であり將た醫者であるといふことは確固不動の事實と信ずべきではあるまいか。果して然らば今回の大戰亂は之を世界全體の疾病

と見て、之れが救濟を神の御手なる天地に依賴するといふことが何んで人間の不自然であらう將た不道德であらう。寧ろ之れが人間本然の立場であらうと思はれる。此一義は今日現在に處する吾人々類の緊急なる一問題ではあるまいか。——今回の大戰亂——之れが人間に於ける皮膚病とか乃至は四肢に於ける腫物の如き輕微なる患累であるならば兎も角深く人間の膏肓に浸淫する五臟六腑の疾病なりとする以上には、一日も早く其善後策を講じなければ終には、後悔臍を噬むとも及ぶなきの結果に陷らぬとも限るまい。而して人間が神に賴よるといふことは則ち天地に比すべき人の手の理解を以て、人間が神を信ずるの初步としなければならぬは前章屢々述べたる所の如しである。

(22) 人間には男女兩性を正解することが隨一の要義にして之れ則ち正反對を受容し得るの階梯となる

今人の手を理解すれば、吾人の所謂敵と身方とは恰も左右の兩手若くは隻手に於ける拇指より中指に至るの三數と、之に對する小指より中指に至る三數の如きものとなる。而して此右に對する左、小指側の三に對する拇指側の三は、共に一定度に於て正反對の意味を有することを察知せらるゝと雖も、此の如き一定度の正反對は人間に於て固有すべき必須の正反對にして、若しも此正反對なくんば人生の意義は全然沒却せられねばならぬ。畢竟するに吾人の所謂敵身方と目するものは、此正反對をいふに過ぎないので人間が現在有する思想なるものは其實不知不識の間に人生の意義を沒却するに努めて居るやうなものである。何となれば敵を敵とし、身方を身方とすることは單に一面的、眼目的、表面的の見解に外ならずして、之を聽くてふ意味よりすれば、此かる思想に捉はれて殺伐極まる戰鬪を事とするなどは、恰も兒戲に均しき感

があるからである、現時に於ける世界的大戰亂の如き大は則ち大なりと雖も其源を探究すれば仍り御多分には洩れないで兒戲に同樣なりといふことが出來る。何となれば戰爭てふものは、恰も左手が右手を呪ひ、右手が左手を排擊するが如く、更に片手に於ける拇指側と小指側との衝突の如きものに理解せらるゝからである。假令何れかの一方が負くるか勝つかにしても仍り双方の損耗と其手の持主なる一個人の責任負擔は之を免るゝことは出來ない。思へば眞に莫迦らしきことの限りにして子供ならば兎も角、大人の態度としては何麽しても受取り難いのである――のみならず我々人類の持主なる天地に對し、否な更に天地を兩手とする神に對して何んと申譯が出來るであらうか。世には智者、學者の數も多數であるに、何故に斯く睹易きの道理を曉らずして、今日の世界的大戰亂をも恰も他人の事の如くに看過するであらうか、之を要するに世間一般に人の手を理解することを疎外し、爲めに男女兩性の根本を誤るの罪に歸すべきであらうと思ふ。ア、人の手の理解てふことは、人間に於ける平凡中の平凡事に屬すれども、此一理解が世に是認せらるゝの域に達せざれば男女兩性の根本決定、續いて和の眞髓卽ち中の理解及び平和の眞義といふことが、世人に正解せらるゝ筈なきが故に人間は自然の道程を進むことが出來まい。而して人の手を眞に理解し得たものは、現時に於て世界中只一人の私のみではあるまいか。之を換言すれば宗敎を以て科學を說き、科學を以て宗敎を理解し得るものは私の外には誰一人として無からうと思ふ。

(23)　現時の世界の大戰亂は男性と女性との鬪爭に外ならぬ

今回の世界的大戰亂、――之を眼目的に批判すれば同盟側と連合側の戰爭とすべきも、之を耳的よりすれば男女兩性の鬪爭と判すべきである現に人間界に於ける兩性の大標本とすべきは何であらうか――今之を女性なる宗敎と男性なる科學とに理解すれば此二者の鬪爭といふに妨げ

はあるまい。更に之を今日の學問的用語を以て言へば「ニーチエ」宗と「ルーテル」宗の競爭と言はねばならぬ。而して何れの方を以て宗敎側とし、何れの側を以て科學側となすべきか、之は一大問題である――誰か之を正當に判斷することを得やうか、恐くは不可能なるべし。抑も此一解決こそは、私の曉明一聲たる「獨逸を救へ」てふ言葉の死活問題となるほど重要なる解決に屬して居るが――さりとて此解決は其實屁の如しである。今私をして之を言はしむるならば、無類平凡の判決を以て然るべしと思ふ、而して曰く、現在に於ける有の儘なりと、――之を詳說すれば男女兩性は敵側にも身方側にも共に平等に存して居り何方にも偏しては居らぬ。併しながら現に戰爭をなしつゝあるものは女性の關與する所ではなくて。共に男性のみである、武である、智と勇との競爭である――仁愛の本然たる女性は之れに關與しないのが事實である。是故に之を耳的に再言すれば、今回の戰亂は敵も身方もあるものではない。科學が科學を攻め、「ニーチエ」宗が「ニーチエ」宗を責め、更に獨逸思想が獨逸思想を攻擊して居るので、恰も同士喧嘩であり自業自得の責罰であると言ひ得る。何んと莫迦らしい話ではあるまいか――何れが勝つても何れが負けても、究極は同一であつて仍り科學の損耗、獨逸思想の減縮、「ニーチエ」宗の蹉跌となつて、其反對に宗敎の正解、和親の勝利、「ルーテル」宗の革命といふことが現はれて來ねばならぬ。之を換言すれば男性が負けて女性が光りを發するといふことになるのである。何となれば之れが則ち天地自然の默契であつて確かに人間の隻手に於て無言に示されて居るからである。由來女性は神的にして男性は動物的である。更に女性は靈的にして男性は肉的であり、更に又女性は陰にして右手男性は陽にして左手なるからである。然りと雖も此論定は只表面的にして絕對的にあらざること勿論である。一體此表裏の解決といふことは其一面に於て、人間の處世上頗ぶる重要ではあるが、更に又表裏を區別して、表を表たらしめ、裏を

裏たらしむること亦更に重要義に屬して居る。憶ふに今日の世界に於て、洋の東西を問はず、國の南北を論せず、男性は男性たらず、女性は女性たらずといふことが事實となつて偖こそ肉に執着する自利的思想なるものが、地球面上に跋扈して、爲めに人間界をして一種怪魔の群集たらしめて、此怪魔思想なる變性男的蠻勇が交互に衝突して現在の如き世界的大戰亂を發起せしめたのである。併しながら是亦人間が自己の手を無視したるの責罰なりといふことが出來るのである。

(24) 中は則ち生命にして人間は勿論あらゆる事物中に中なきものは天地間に一とつもない

今五大洲を以て、之を假りに人の片手とすれば何麼んなものであらうか、日本國は前に述べたるが如く其名の無を表し、中を象り、且つ謙遜の意義を有するよりして、之を拇指なりとすれば獨逸國は果して何れの指に擬すべきか、其名の獨逸にして高位を表し　且つ其知能の敏にして科學的なるよりすれば、之を中指に解するを以て適切とすべきであらう。果して然りとすれは此眼目的中と耳的の中とは則ち隻手に於ての最高位と最低位にして所謂正反對の兩極なればこは自然にして調和の好適例を表するを察せらる――――抑も調和なるものは恰も男女兩性の如く、必しも一定度に於ける正反對の意味あるを必要條件とすることは自然の默契なり。こは世人の誤謬の伏在する所の重要なる一義であれば特に注意を要す。若しも世人にして私が言ふ所に對して不服あらば、心靜かに自己の片手を目睹して其實態を研究せらるべし、而して克く〳〵隻手を諦視して自然の默示を會得すれば、中指なる獨逸を救ひ得るものは現今に於て隻手の拇指に適する我國のみであるといふことが了解せらるゝに庶幾かるべく。而して此人の片手に二個の中を有するなどいふことは、未だ數の何者たるを知悉せざる讀者には甚だ不可解なるべきも、苟も中なるものは之を究極すれば到る所悉く中にして之を隻手に就ていふも、隻手の五指は勿論其各指の全部所として中ならざるはないのである。畢竟するに極端といふものは隨時隨所に於て現はるゝの名にして此極端の全部は勿論、其一小分さえも必ず中を抱持して此世に存立するのである。――中は則ち生命にして生命を離れて此世に存立すべき事物のあるべき道理はないのである、況んや人類に於てをや――更に況んや邦國に於てをや、人に就ても邦國に於ても、必らず中たり得べは勿論であるが、其然ると同時に絶對の中となることは人類にせよ邦國にせよ決して出來得るものではないのである。此理と實とを曉ることが人の手の理解を俟つて始めて得られるので、畢竟こは人間に對し特に附與せられて居る重大なる特權と信ずべきである――今人の手を根本として世界的大戰亂に於ける現在の有樣を觀察すれば、人類の思想なるものが、表裏觀を去つて單に表面觀に由つて支配せられつゝあることを看取せらる――

此一面觀は則ち眼目的にして敵を敵とし身方を身方とするに過ぎないが、表裏觀卽ち二面觀によれば敵は身方、身方は亦敵となる以上に、此二面觀も亦眞なり善なり美なりとすることなく更に他面に於ける半部の信を包有するが故に、世間の一面觀と私の所謂二面觀とは、後者は前者に對して其倍量の廣袤を有するにあらずして其實は四倍六倍――更に無限倍量を領有することになる。之れ則ち人の手の理解より得たる人類の特權とも信ずべきにして、確かに神の無聲の默示の主要なる一部である。――是に於て更に二面觀に由つて現實を述ぶれば、日本は獨逸にして、獨逸も亦日本であるとの理解も出來ねばならぬ。而かも日本以外の邦國は悉くさうであつて豈に獨逸一ヶ國に限りはせぬ、英國にせよ、佛國にせよ偖ては米國、支那、印度、猶太人等あらゆる邦國あらゆる人類皆悉く我國我同胞と眞に一身同體である。豈に世の中に絶對なる獨逸國絶對なる日本國――續いて絶對なる猶太人絶對なる日本人など存立するの理があるべき

であらう。若しも彼此甲乙などいふ區別的邦土、人種などの存立といふことを絶對に是認するならば、蓋し固より眼目的區別に過ぎないので、この眼目的にのみ憑據するといふことは人類禍害の源となるものなれば、こは人間の得手勝手といふべく、現に人の手を無視疎外するに當るが故に神の聖慮に悖るものといはねばならぬ。之に反して耳卽ち聽くといふことは反對なる他面他側を信じ之を受容するの謂なれば之を更言すれば神を信ずるといふに適して居る。現に人身體に於ける五官に就て之を見るも眼は人間の意思によつて隨意に開閉すれども、耳は眼目に異なり人間の意思に從はず耳を動搖し得るものは人身體中に於て只一つの手ある許りである。由是觀之、耳は神の無音無聲を聽くべき高尙且つ人心に支配せられずして却て人の身心を支配すべき高等なる官能を附與せられて居るものと信ぜなければならぬ。元來手と耳とは、現に鼎などに於て見るが如く耳は手となり、手は耳となる所よりするも其名異なりて其實同一なるものと解すべきである。且つ其意義より見るも三の表裏卽ちミミを有するものは人の手ではあるまいか。

凡そ人間が彼此の事物に就て劃然區界を立つるといふことは肉的思想に屬し、之を靈的よりすれば彼此の區劃は皆無とならなければならぬ。——抑も靈なるものは之を究極すれば零、禮、無、空等を斥すの名にして片手に含まるゝ所の無形無象なる六數を以て其本然と曉るべきである。——世の中に於て此隻手に含まるる六數が眞に正解せられざる限りは宗敎の本然なるものが正解せられる所以もなく、從つて世間一般が生命を無視するは勿論、戰亂に就ても之れが自然の講和は迚も成立する見込は六かしい、之を要するに世の中は六數に由つて立ち六數に由つて破壞せられるてふ表裏ある現實を曉ることが必要であるが、之れ卽ち私の數を說くの主要なる眼目否な耳であるので、六數の解釋——何んで之を忽にすることが出來るであらう。

讀者亦少しく靈的に據つて、廣く且つ狹く人生

といふものを考察して見るがよい。現に今五大洲に生息する人類は悉く我同胞ではあるまいか假令惡人でも敵でも、皆均しく我々の同胞たるに違ひはないであらう。之を今人の手に就て言へば恰も五本の指が片手にあるやうなもので、更に之を世界に並立する各國としても同一である。——果してさうであるとするならば恰も中指に比すべき獨逸側を連合側に比すべき周圍の四指が、それを包圍して何の譯もなく（例令譯あり として も天國には通用しない）虐じめて居るやうなものではあるまいか。——然り而して若しも目的を達して中指を切斷したとするならば果してとうであらうか——困るものは切斷せられたる中指にあらずして、却て遺殘する所の四指と隻手の全體でなければなるまい。是を以て言へば、現に身方側が目的を達するの場合は卽ち失望の場合と見ねばならぬ、此の如きは一個人に就て見るも日常の人事上に就て何人も多少の經驗を有する所にして、事實上よりするも之に類似の實證を得るは甚だ容易である——由來人間といふものは正反對の思想と實行とを有するの兩極が、交互和合によつて睦まじく生活を樂んでこそ、茲に靈長たるの本然は發揮すべきなれ。——是を事實に就て論ずるも假令獨逸が勝つても負けても、其損害といふものは仍り世界中の連帶責任でなければならぬ——今人の手の理解に憑據して戰爭なるものを批判すれば、元來戰爭とか、鬪爭とか喧嘩などゝいふものは、全然人間の誤謬思想を表するものにして、土臺人間が人間を罰するとか復讐するとかいふことは神より許されては居ないので、無限に怨することが人間の神に奉ずるの道に外ならない。そこで人間に制裁を與ふるものは神でなければならぬといふことが自然の道德である。從つて國家的に法律を編制して人民に懲罰を與ふるものは人間其ものでなくて神と人との中保に在はすべき神の御子でなくてはならぬ、是故に人民にして官吏となりて局に法制にあるものは——神の御子の御聖名によつて、毫も私なく中を以て法律を遵行しなければならぬ筈のものである——之れが卽ち人の手に

示現せられたる神の無聲の法律である。

(25) 現今世界全體を支配する人類思想は悉く獨逸思想である

右に述ぶるが如く、人の隻手を以て五大洲に營ふれば、隻手に於ける一指に病氣が發したる場合に其責任は其片手の全體にあるが如く、五大洲の一部たる獨逸に病的思想が發生して其結果五大洲の全體に障害を及ぼしたとしても、夫れは獨逸一ヶ國の責任でなく仍り世界全體の連帶責任であることは最も睹易きの理と實である。誰か一個人に於て眼病に罹つた場合に眼のみの責任を云々して眼のみを罰しやうとするものがあらう。況んや現時に於ける人類思想なるものは、其全體に於て悉く獨逸思想なるに於てをや。現に連合側に於ける獨逸の軍國主義絶滅の思想の如き。之れ卽ち獨逸思想の表現ではないか。克く〳〵其裏面を探究すれば、我々連合側の敵なるものは、眼に見る所の敵國なる彼れ獨逸にあらずして、却て身方なりと信ずる我々連合諸國の此にあるではなからうか。更に之を言へば連合諸國の全部に於て、我敵なるものが眼に見るべき外部にあるにあらずして、特に耳に聽くべき內部心中に存するではなからうか。併しながらこは我々連合側に限らず獨逸側に於ても亦さうで、獨逸の敵は外部にあらずして却て獨逸人の心中に當の敵が潛在するではなからうか。—更に之を我國のみに就ていふも我國の敵は我國人の心中にあるので決して外部にのみ存しては居らぬ。乞ふ見よ、現時我國に於ける全部の思想なるものは。殆んど獨逸式にして科學萬能思想自力宗、自利宗、拜金宗卽ちニーチエ思想に支配せられて居るではないか、我國の何所に他力宗なるルーテル思想の眞髓が現在に發揮して居ると言ひ得るか——此所を克く〳〵研究して國家百年の長計を樹立せねば迚も理想的の平和なるものは求め得られる譯はない、若しも果して人間の思想が現在の儘であつたなら、假令講和が成立しても、甚だ不完全にして恰も毒を

以て毒を淸めるが如く、只一時眼目的の平和に止まり未來永遠の平和といふことは、到底收穫することは出來ないものと信じられる。是に於て人間は更に人の手に就て講和の方法を學ぶの必要があるのである、蓋し人の手なるもの〻本然が表裏卽ち掌背（勝敗の意味又男女兩性の意味を默示して居る）を有する以外、更に廻前廻後なる二種の轉換運動（佛敎の所謂回向の意味となる）を營爲するやうに、神より造り與へられて居ることを深思せねばなるまいと思ふ。

(26) 今日以後に於ては、愛の實行卽ち犧牲的形無象の宗敎が望ましいのである

第十六世紀に於て彼のルーテルが、宗敎の革命といふことを完成したことは遍ねく世人の知るところであるが、私をして之を言はしむれば此の如きは、宗敎に於ける一部の改造とか變革とかいふことは出來るであらうが、之を以て宗敎を完成したなど〻いふことは眞に沒理の極であると思ふ。宗敎元來無限の實有を以て其本然とする以上、全然とか完成とかいふ言語は之を宗敎的よりすれば、偶像的の言葉にして——土臺人間には完全といふことよりは、半ばといふことが人の手の意味に適して、人間の本然なりと信ずべきである。例之ばルーテルの思想が自然の半ばであるとすれば、ニーチエの思想も亦自然の半ばであつて、此兩者を調和するも依然として宗敎の半ばでなければならぬ。更に又之れに對して、あらゆる人類思想を調和するとも依然として半位を脫することは出來ない。是故に宗敎革命といふことに就て之を言へば、假令ルーテルの宗敎革命に再度再三度は愚か——六度七度更に無限回數の革命を施すとも尙依然として宗敎の半であると信ずるのが當に宗敎の本然を理解する達道的人間の思想と信ぜねばならぬ。——さあ此處である——私の生命は只僅か一言なる此半を信ずるといふ實行の外には絕無皆無——無々々——六六六——である。私は實際この無々々の實行を以て、世界のあらゆる人

間同胞の苦難を負擔したいと覺悟して居るのである。由來人間が自己の思念を以て完全なり聖なりしと信じて、却て其實行に怯ならば――如何にして神の半面に觸接することが得られやう。蓋し足るは、半の正反對にして足るを人の足とすれば、半は自然にして人の手となるではあるまいか。憶ふに現今我國を始め世界中に於ける多種類の宗教に於て、此足に比し偶像崇拜に比すべき、自己の思想を以て完全なりと妄信するの宗教家が殆んど其全部ではあるまいか。果して之を然りとすれば、現今の社會に於て生命が無視せらるゝことも、世界的戰亂が勃發することも、決して之を偶然なりとはいふことは出來ない、人間の偶然てふ一語は、自己の責任忌避の遁逃語にして、眞に惡魔の好伴侶といふべしである。更に憶ふにルーテルの思想なるもの亦自己の思想を以て完全なり、自己の聖書解釋を以て眞なりと妄信したる六分一の宗教革命ではなかつたであらうか。私は此判定を以て「當らずと雖も遠からざる眞事實なり」と信じ、常に「ルーテルの器も亦小なる哉」と心の底に思ふて居る。

ルーテルを以て小器なりと評すれば、現時の宗教家卽ち偶像崇拜者流は異口同音に私に對つて現在の宗教を如何に革命すべきかと詰問すべきも、私は平然之に答ふるに躊躇しない、而して曰く、今日の場合はルーテルの思想より更に百尺竿頭に一歩を進めたる――愛の實行則ち犧牲を主とする――眞の女性的なる――而かも眼以て見るべからざる耳の宗教――則ち菊一文字所謂無言なる生命の本態が必要であつて、此生命なる眞宗教が世界全體を支配する時代となつて居る」と――然り而して此の如きは國としては世界唯一の犧牲國、和國、菊の國たる我國より外に何所に一ヶ國でも存するであらうか。由來我國は前にも述べたるが如く人間一個人より言へば片手の國、片手より言へば拇指之國なれば拇指が恰も四指と相調和するが如く四民四海と調和すべき邦國にして、世界中に於て我國の敵視すべき邦國及び人類なるものは只の一つもな

いのである。此私の斷定は私の私言でなくて、二千年前に於けるキリストの豫言であり之れが確かに今日の場合に適中して居るのである。――私は曾て聞いたことがあるが、彼の英邁剛毅なる獨逸の「カイゼル」陛下が公言して宣はく、「朕にして世界を統律することを得ざれば次ぎに來るものは日本皇帝陛下なるべし」と、誠に達言と謂ふべきで、其豫言が期せずして今日に臨んで來たのである。されば今日の場合、我國が現に敵視するが如き表面を有する獨逸を救助するの愛の實現は、則ち神の聖旨を迎ふる所以なると同時に、義と和とを世界に示すの魁たるべく感せられ、私の所謂「獨逸を救へ」の一言が現實となるに至れば、蓋し其實は獨逸を救ふでなく我國を救ふの最上策なりと言ひ得るのである。――何となれば我國が獨逸を救ふは則ち世界萬國を救ふ所以、更に世界萬國を救ふは己れ自からを救ふ所以なるが故である。畢竟するに敵と身方とは心の持ちやうでどうともなる、「我雪と思へば輕し傘の上」ともいひ、又我身の汚臭は他人ぼと厭ふべく感せぬともいふではないか。憶ふに獨逸と日本とは元來相表裏すべき因緣を有することは、恰も片手に於て中指と拇指とを以て輪形を造ることが雙手の自然なるに均しく此二國の結合は雙手に比すべき世界全體の平和の端緒なることは神の契默と信じなければならぬ。されば此日獨二國が協和一致の態度を採るならば、世界の平和は靡然として彼此八方に展開し期せずして茲に世界的一大天國なる和親の樂園が涌出することになる。古言に曰く、「正を踏んで畏るゝ勿れ」と日獨の親善和協にして既に全智全能なる神の聖慮なりとすれば、之を斷行するに就て、何等躊躇をも逡巡をも要することなく――一意神の聖旨を奉じてこそ、我國が眞に大和撫子なる浦安國たるの名に負かざるべく、大和魂の眞價も亦之れに倍蓰せんのみ。――終りに曰ふ、要するに「獨逸を救へ」てふ私の一叫に就ては、私は之を無責任に絕叫するのでなくて、果して私に共鳴して呉れる二三人の後援者を得たならば、私の一命を犧牲として、

世界的一大平和を繙いて見やうと覺悟して、之に對する順序方法等も不束ながら私には一定して居るのである。――ア、我親愛なる同胞諸氏よ、宇宙を知り、五大洲を知り、日本を理解し自己の今日を思ふて、自分も確かに社會の一員たることを曉り、且つ神の愛護の手に由つて今日を送りつゝあることに考へ附き給はゞ、社會平和の爲めに一死報國の赤誠を發揮し給はんことを切望に堪えない次第である。前途有望

（附　言）

由來、我國は火風水害に加ふるに、地震大嘯風等天災地變及び人事上に於ける災厄の頻々たることは事實であつて、之れが我國をして貧國たらしむる一面の原因をなして居ることは誣ゆべからざる事實なるも、この我國の貧國てふことは其裏面を見れば、之れ則ち我國に對する神の恩愛の切實なる所以と信ずべく若しも我國をして金錢物貨に豐富ならしめんか、爭でか「負くるは勝つ」の謙遜なる態度と實行とが得られやう。憶ふに我國の貧國たる所以は則ち之れ天佑にあらずして果して何をか天佑とすべき――神は愛するものを苦しめ之に懲戒を與え給ふといふことは古聖の何れも遺訓し給ひしところであるが、之れは左もあるべき自然にして、況んや今回の如き世界に於ける平和の魁をなさしめ、世の瞻仰に値すべき實績を得せしめ給はんが爲めには、其警告として當然、天災地變は最初先づ我國に對つて降來することを豫め覺悟せねばならぬと思ふ。蓋し天災地變をして、眞に意義あるものたらしむると否とは、一に我國臣民の覺醒に存するので、私が特に切望する所のものは、人間たる以上は天災地變を以て父母の偉愛の發現なりと信じ、神の榮光の全からん爲めには、天災地變に對して、怨み嘲つ等のことを虔しみ之に藉りて、却て人間自省の誠を神に貢ぎたいの一心に外ならない一事である。

豫約募集廣告

△豫約募集之趣旨

本編「敵を救へ」に述べたる所は、數則ち人の手に就ての其論證の一小部分にして、こは數の全體より見れば正しく九牛の一毛にも比すべく、要するに今日以後に於て社會人類の未來永劫を支配すべきものは數を措いて他に之れなきは勿論、人生に於て禍福吉凶其ものが數に由來するの原理を詳說し、併せて凶と禍とを轉じて、吉と福たらしむの方法を示したるもの則ち

開運捷徑　**數の吉凶と其原理（一名人の手）**

にして、本著は世界唯一の思想を述べたる原著中の原著なれば、凡そ人間たる以上必讀すべきの書なるは勿論、此一冊を讀みて無聲の本然を開悟するを得ば、此一冊克く天下有聲を說くの典籍百萬部を讀了するに優るべし。而して本著の起稿は既に二年餘を經過したれども、本會財政不如意の爲め出版の運びに至らざりしも、時運の變遷上、本年は是非共之を世に公にせざる可からざる必要に切迫し、特にも我國民に於ては一日も猶豫すべからざる時運の到來に鑒み、玆に豫約を募集し比較的廉價を以て世に提供せんと欲す、されば時世に鑒み國家を思ひ自己を保護せんと欲するの士は、左の豫約方法

に由つて速かに申込あらんことを望む。

△豫約方法

陸軍大將福島男爵題字
貴族院議員江原素六先生無言之題字
成蹊學校長中村春二先生序文

開運捷徑 **數の吉凶と其原理** 一名（人の手）

紙數菊版 二百五十ページ以上豫定
クロース金文字入 美本上製
正價 金壹圓五拾錢

（豫約申込期） 大正七年三月末日限り
（豫約減價） 豫約者に限り金壹圓（郵送料本會持ちとす）
但し申込時に豫約金全部拂込の事
（出版發送） 大正七年四月一日より申込順に由る
（附言） 本著は、に讀者の反對論文提出に就て三百圓、二百圓、一百圓の三等の懸賞金を附しあり

終